

# 川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可  
昭和四十四年五月二十五日 印刷  
昭和四十四年六月一日発行 (毎月一日発行)  
(第四十五号)



No. 45

特集・雨のテーマ

六月号

川柳塔社主催  
路郎忌句会

会費 二百円

兼題 柳話

「寝転ぶ」  
「だしぬけ」  
「聖書」  
「一と握り」

中島生々庵  
若本多志  
川村好郎  
西尾春巢  
北川春巢  
選選選選選

(席題三題)

昭和四十四年七月七日(月) 午後六時  
会場 以和貴荘(阿倍野区松崎町二丁目)

電話 622・1275番

\*\*\*\*\*



楽しいお買物は  
近鉄で!

アベノ上六  
**近鉄**  
アベノ 621-1231  
上六 771-3331

\*\*\*\*\*

路郎賞・川柳塔賞発表と同人総会!

昭和四十四年十月十二日(日)開催!

★ 同人総会は午後3時から—二賞発表句会は六時から—

会場 アベノ 以和貴荘階上大広間

川柳塔社

★ 路郎忌初のナイターです・お気軽にお越しください

すばらしい  
着心地

蝶矢  
シャツ

## 今月のことば

機会が出来て九州柳川の水郷を訪れた。柳川といえば北原白秋であるが菖蒲には早い四月の末であった。町の表通りを歩いただけでは情調はわからない。「堀割り」を舟でゆく時初めてその優雅な詩のすがたを現すと案内書にも書いてあるが街の雑然さはひどい。それに加えて十日程前から河の浚渫工事をやっているため水量もへり減ってしまっている。いろいろ抱いて来たイメージに相当な歪が出来たのも仕方ない廻りあわせである。一時間余の川

下り舟の終着場近くに白秋の生家、やや離れて詩碑がある。通り筋は魚の異臭で旅人には一寸忍耐を要する、生家はがらんと薄暗く大きな竈も古びて祖父の代の盛業が偲ばれる。この家業の盛衰と濠のただずまいが詩情をかきたて育てて行ったのであろう。川柳人としての私の眼に映じたものは挽歌の哀調にも似た柳の水影だけであった。竿で舟を下だす船頭がきかしてくれた白秋の歌三つ四つ。そのさびた声は忘れ得ぬ柳川土産の印象となった

味気なく柳川の柳水にこる

城趾影なく堀の柳に悲歌流る

柳にかくれ白壁にぶく殿の倉

落書を憤る白秋の碑なるが故に

魚の異臭に白秋の生家逆らわず

中島生々庵



川柳塔六月号

# 川柳塔六月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことばと句帖	中島生々庵	(1)	
川柳塔	(同人作品)	中島生々庵選	(4)
没の季節	清水白柳	(2)	
川柳日記	麻生葭乃	(31)	
川柳初篇研究	(七十二)	(20)	
前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄			
川端柳風・故高須亜三味・丸十府・岡田甫			
秀句鑑賞	清水白柳	(28)	
舌の効用	高鷲亜鈍	(30)	
薫風氏にお答え	本田溪花坊	(44)	
恐妻アラベスク	東野大八	(26)	

私論・柳論

## 没の季節

六月十日は時の記念日だが、その頃はまた入梅の季節でもある。十五日は父の日だということを暦を見ても気付かなかったのは私だけかも知れないが、ともかく雨の多い月を水無月(みなづき)とつけたのは誰か知らないが皮肉な話だ。句の上でも六月はうっとうしい没の季節なのである。その原因はどこにあるのか知らないが考えてみるとそういうことになりそうなのもある。四月の花見頃からゴールデンウィークにかけて外出が多くなるので、自然に旅行吟のような句を作り勝ちになる。旅行吟は目で見たいものをそのまま句にまとめるのでどうしても平面的な描写に終ってしまうことが多い。作句意欲は充分にあるのだが、意欲だけで燃焼しない素材を句にまとめるためにそうなるのであろう実感の句は強くとよく言うけれ

★ 編 集 後 記	..... (一三夫) .....	(65)
★ 一 路 集	「口先き」..... 尼 緑之助選..... (47)	
	「貸し傘」..... 岸 南柳選..... (46)	
	「テープ」..... 竹内圭三選..... (46)	
★ 各 地 柳 壇	..... (文秋) .....	(58)
★ 本 社 五 月 句 会	..... (庸佑) .....	(54)
★ 柳 界 展 望	..... (薰風) .....	(52)
★ 大 萬 川 柳「湯 気」	..... 清 水 白 柳 選..... (50)	
★ 初 步 教 室	..... 本 田 恵 二 朗..... (48)	
★ 近 作 柳 樽	..... 菊 沢 小 松 園 選..... (32)	
★ 私 の メ モ か ら	..... 吉 田 水 車..... (31)	
★ 雨 の テ ー マ	..... (22)	
	・ 同 人 特 集 ・	
	金井 文秋・直原七面山	
	傍島 静馬・不二田一三夫	
	富士野鞍馬..... (42)	

ども、悲しみの枕元に座っていて、その場で句が生れるものではなくて、そこで出来るのは事実の報告に過ぎないものでしかないであろう。その場の深い悲しみが心の奥に潜んでいて、何かの時に湧き出る句の中にその時の悲しみがこもっているというので実感句の強味であると思う。だから旅行吟などで、その場で作句したものに心をひかれるものが少くない道理である。そうした句が集まってくる六月は没の季節ということになりそうだがその外にも没の季節はあるがこれは一般的なものではなくて、個人が招く没の季節なのだ、それは人より一句でも多く入選しようとする焦りから無理な作句をして自ら招く季節なのである。こんな季節は招かぬ方がよいにきまつているから心して作句したいものであるもう一つ没の季節がある。それは作家がある水準に達してくると、周期的にやってくる没の季節なのだ。これはその作家の成長を示す年輪でもある。

(清 水 白 柳)



中島生々庵選

青森市 工藤 甲吉

右向けへ右向く頼りない男

女上位大工の道具までそろえ

平凡なものにメニユーは一決し

料亭の皿へ鯛は出世する

孫「伸」一年生へ

天と地を躍って跳ねてランドセル

大阪市 本多 柳志

客に来てまで水道をしめに起き

花の色は移りにけりなひなまつり

山家育ち賞めて師道にある媚態

栄転のデスク左遷へ引き継がれ

造成地もうはすかいに道がつき

大阪市 石倉 旅風

蛸がまだ居そうな壺に枝を挿し

一枚を着たり脱いだりさす陽気

花ごころしるも知らぬも通り抜け

京(二句)

土地感が花見小路に足を向け

北山の時雨は京のお添えもの

大阪市 正本 水客

思い出したように時雨れて湖明け

鯉とる舟か動くともなく動く

街の灯に湖またたいて起きている

汽車どこまでも穴道湖の顔が見え

塔三重きざはしは歴史のきしむ音

大阪市 市場 没食子

出嫌いが出好きの妻にほっとかれ

間のびしたけれど原稿だけ喋り  
老夫婦消費時代へ溶け込めず  
浪人も留年もして卒業し

さあ春だ猫も浮気の身だしなみ

岸和田市 内藤きさ子

ワンワンの悔みを花の下で述べ

悪嵐を死刑に処する春の川

口答え控え親孝行とする

水色のタオル昼風呂の陽をはしく

えにし薄き亡父の墓なりタンポポよ

東大阪市 久米奈良子

腹乃先生に

師をおもう生駒の山に雪のこる

人形も泣くのか胡粉はげかかり

さまよいの果てにつかみし珠一つ

火を恋えば水の清さを教えられ

カーテンを引く抵抗へ花こぼれ

岡山県 浜田久米雄

掛時計生きろ生きろと鳴っており

また叱言言うかと妻の身構える

晩酌でひとりぼっちの酔いとなり

きのうまで歩いていたという命

錠剤の効目わからぬままに飲み

倉敷市 本田恵二朗

働けるまだ働ける独り言

迷信がどっさり詰っている旧家

一合五勺天上天下われのもの

真相を知っているからとほげとき

忘れてた満期が利子を着て戻り

高槻市 傍島静馬

官舎街さすがズラリと国旗立て

もっと有ったはずやと財布改める

もう買うたやろと新刊借りに来る

たいがいは嫁に遠慮をして無事

靴そっと蹴っても足組み気が付かず

大阪市 大坂形水

入社した金の卵の二九月目

ドラッカーをベストセラーにした表題

偉い人だったが何か欠けていた

かかる時女きょうだいなればこそ

役員の一人数字がよく分り

豊中市 戸田古方

紀伊半島を往く

十津川史モラルがタバコ捨てさせず

杉木立大滝ここがいい構図

病院へ行くねんねこと乗り合せ

なめらかな湯の肌夜明けが待ち遠しい

湯けむりの中で病歴自慢する

大阪市 橋 高 薫 風

盲人の手を引く先を 道おしえ

夕桜 盲人鳩の餌を こぼす

夕桜 琴 朱の布に包まれる

吐く息も吸う息もなし 夕桜

夕桜 人の情は大切な

大阪市 後 藤 梅 志

みな樹樹は生きている枝上を向き

句碑をのこす未練たらしき人の世や

男ではだめか 測候所もおんな

馬鹿といわれて腹の立ったはきのうまで

不思議なバツタだ飛ぶはねはもってない

大阪市 不二田 一三夫

ゲバリスト地下の予科練泣いている

渴いたペン今さら恋でもあるまいに

都会の簪は土の香を知らない

奇 席

いとし・こいし

しゃべくりのお手本高座のゼントルマン

小田・栄子

夫婦漫才苦楽を共に芸の虫

西宮市 島 居 百 酒

純真と放っておけない真似ごとし

旧蹟のイメージバスからもう毀れ

待合の壁は国中花ざかり

山門の古木浮世へ新芽だし

竹原市 小 島 蘭 幸

もみくちやにされ嬉しさをファンと分け

雨の日よハガキ一枚来て楽し

給料日これっぽちのうれしさよ

恋に遠慮は禁物などと金があり

大阪市 山 川 阿 茶

高校野球(一句)

最終回アナ上ずった同点打

去年掘り残した若竹の伸び

派手な服気になり出した背の丸み

治療台芸妓上がりとわかる足袋

大阪市 中 川 滋 雀

近火(二句)

火事跡の始末へ閑人また囲み

焼け焦げた蒲団に未練が乾かされ

しおらしく都会の桜も蕾んで来  
九回裏チャンスは余生に賭けてみる

大阪市 児島与呂志

よう君ももどつて来たかと手を握り

市電に生きてたなきがらが酔う

合理化と云うけどものにいたためられ

男ひとり合理化の中に立つ

芦屋市 丸川初甫

働きにゆく足入れる靴を拭く

窓あけて今日の多忙へ深呼吸

泊り木の端で世間にうとく飲み

梅田コマ劇場(窯ぐれ女)

格好の恋の場となるのほり窯

笠岡市 出原真奇

甲子園砂と涙を持ち帰り

金持って来いと桜も笑いかけ

一人旅キジが友よぶ山の宿

娘と別れ角を曲つて拭く涙

兵庫県 遠山可住

質問のホコ先にぶる人間味

歓送迎会済んだところへ花が咲き

栄転と左遷が並らぶ床柱

酒いける課長と知って安心し

大阪市 室谷鉄舟

掘膳を一番喜ぶ妻と旅

びしょ濡れになつて恋猫帰つて来

ちびた靴はいて来たのに税まけず

三月三十一日限り市電廃止

文明が市電を足にしなくなり

桜井市 岩本雀踊子

同情はきらい啞の目が叱る

ある場は愚妻にもなる妻の知恵

生きて行く影がのびたりちぢんだり

気楽な暮しと他人が見た暮し

大阪市 水谷竹荘

妻の愚痴素直に聞いて寝るも歳

箸袋ためて食通自慢する

逢えばすぐ時間気にして叱られる

男舞いすめば女の眼にもどり

名古屋市 吉田水車

舞妓はんふつと衿あしかゆくなり

番頭さんニコニコしながら困るなり

要するに人も土もコンベヤーで運び

米、宇宙船リハーサルに成功

人間の欲月冷ややかに見守れり

大阪市 木村水洞

愛嬌のよい娘は少し綺量落ち

くだまきに吉野まで来るほど平和

失恋をかくして唄う花の下

ちっぽけな見栄を長屋は競い合い

尼崎市 高津徹也

音痴だから童謡で席がもち

縁側によその子が来る春の風

頃合いをよく心得て幹事なり

にわか雨世間話が解散し

京都市 都倉求女

春風へ小さな冒険誘われる

ひび入れば別々に反射する鏡

夕焼へそれぞれ一日終えた影

応挙声雪展

似たようなやつならうちにもある屏風

松江市 中川晃男

月おくれ〃雛まつり〃

落ちぶれし実家思い出す雛の宵

鼻欠けし雛は嫁ぎし姉のもの

雛にも負けじと装う小さき客

神妙に坐らせられし雛の客

岡山県 藤原秋月

気にするなと言って気になる事を言い

磨滅した印鑑停年近くなり

通勤の道路へ屋根が欲しい梅雨

葉草をぎょうさん植えて病み続け

神戸市 仲 どんたく

焼芋の笛に誘われ独り者

春駝蕩トイレの落書読んでいる

春闘の妥結を桜待ち切れず

原子炉の機械の手に似し病みし手よ

西宮市 若林草右

税務署も課長となれば五ツ玉

大学紛争

ゲバ棒へ頭冷やせと雪が降り

師弟道ガッチリ閉じたバリケード

天気晴朗戎さんよく儲け

守口市 羽原静歩

ばかされるように神話が顔を出し

先様の趣味も覚えている話術

風呂敷へ小さな愚痴を入れて来る

食パンの耳をスイスイ食べ残し

室戸市 奴田原紅雨

さくら咲きみだれ日本の歌がない

隙間から這入ると風は見つけられ

庶民とはまぐろの餌になるさんま

鳴門から戻りわかめの香をほどこき

高槻市 福田丁路

栄冠の蔭の力を知るや君

風薫るローカル線の汽車ポッポ

やっどこさ秘境へポロバス辿り着き

四国山陽一人旅

一人旅気楽な宿で宵寝する

鳥取市 藤本礎山

稀れに逢うのに倅せな人が居り

ライバルを先ず賞めて居る娘の自信

猫の子に病臥の日々を話しかけ

カラテテレビ安いと知った闘病費

明石市 阿万万的

倉敷大原美術館にて

ルノアールの裸婦はのぼのと湯気に似て

羊飼う草原少女も初夏の顔

第十一回日展を見て

さいはての街原色で夕焼ける

白の濃淡薫元の昼静かなり

大阪市 天正千梢

煩雑な暮らし魂まで死なせ

体面をつくろい仮面までかぶり

視線をそらしたくらみさとられる

こさざみにあたえる愛の無限なり

高槻市 若柳潮花

ヒスめいた音もたてえず一の糸

飛ぶ鳥を落した人が借りに来る

三味抱いて去ぬ色街を風が抜け

手造りの小鉢師匠と向う酒

大阪市 西出一栄

こよみに反抗したよな日がつつき

人間味静かにお茶をすすする時

これで満足してますとは負け惜しみ

女なるかや猪首にも首飾り

下関市 桜川不水

久米雄氏と久瀧を叙す

追懐をサカナに酒盃飛ぶ如し

ガタガタの入歯でサ行はたらかず

落シャキリシャキリと地酒唄になり

田吾作も今日は旦那で雨と飲み

富田林市 岩田美代

うつぶんがあんなとこまで水を打ち  
ゆっくりと楽しむように花は散り  
セーターの過去をほどこいて編み直し  
散る花へ私の結論まだ言えず

大阪市 酒田清子

調子の良い日は注射の針がこわい  
思い直そうまだまだ重患がいたはる  
私服着たナースのなんとあどけなさ  
母逝きて不孝を詫びる術のなし

京都府 大鶴喜由

嘘には嘘云うてあきうど笑い合い  
あと一步のムードを女なぜか笑い  
いやな目で見ればシャツの垢爪の垢  
母を撮る娘のおもいやり櫛を出し

藤井寺市 西いわを

べたべたと床に吸いつく孫の足  
場違を感じて馴染めないものが出来  
附合うて無口な人と長続き  
陰口を言うて心が晴れてくる

大阪市 西森花村

不甲斐ない自責ついでに部下叱り

銀婚式宿命論者になっていた  
大文字小文字のZはぐれそう  
ハンバーグロボットじみた妻が出す

奈良市 村上春巳

小さい小さい掌で花びを追うている  
ここだけは静かな花の老夫婦  
商人の目に大仏殿よく入り  
センベイはもう無いゼスチャー鹿に見せ

枚方市 宮川珠笑

やっと得た職を交れという手相  
兎など追うたことない猫の鈴  
夜毎酒与え夫を飼育する  
ホステスと握手した手で妻を撫で

香川県 三井酔夢

老眼と言われ終日無口なり  
一部増築(一句)  
負けるかと隣は二階建てらしい  
霧深く神話のような恋だった  
夜桜のざわめきを聞くひとり酒

熊本県 有働芳仙

老人ホームかじられた胫伸ばしに来

接吻をする気が眼鏡を外したり  
月光に恋を濡らして奪われる  
札束曰くもてているのは僕なんだ

熊本市

英子改め  
楠田ひで子

旅先にいる気で青空みつめたり  
庭先をひとまわりして花を活け  
走るまい一バスおくらす年になり  
やっときた峠でみんなふりかえり

大阪市

神谷凡九郎

二人で居るからいつまでもいつまでも話  
私は女そんな顔が女にさせない  
生きている事はいい加害者の人権  
かれ切った涙でのぞいて見た世間

諫早市

大崎筆染

論争に時の氏神巻きこまれ  
妻のクセのみ込み世帯まるくなり  
追求を受けて入れ知恵口ごもり  
先代の羽振りが生きている垣根

岡山県

直原七面山

八方破れの前衛画  
任せておくと医者無口

汚職を知らぬ椅子で停年  
後れ毛をかきあげ女悔いていず

大阪市 金井文秋

痩せないといけませんと医者は肥え  
寄ったとこたどればわかるはずの傘  
見向きもされず春の満月  
教育ママのプライド二部は受けさせず

大阪市 宮尾あいき

つくしの子あわてん坊が摘み取られ  
踏れても草は素直に花を付け  
赤信号向い合せに待つあせり  
姫路城のお花見  
咲き誇る桜へ柳つつましく

堺市 新谷笑痴

娘のサラリー日  
初サラリー父と南で逢う話し

家原寺吟行

落書は皆まじめなり文珠堂  
合格のお礼校章よく光り  
先生も人間だった汚職記事

岡山県 横山一声

お隣りの三味にあわせる花の下

入院をして見りゃここにもボスがおり  
金策に行くのに花見かと聞かれ

岡山市 江 国 幽 谷

赤字線私一人のバスが行く  
草餅に春の匂いを入れて搗き  
剣に抜き盃にもして舞扇

出雲市 原 独 仙

悪役の悪が悲劇を盛り立てる  
急ぐこと要らん人生下り坂  
老妻は臥すイヤホンで観るテレビ

姫路市 隠 岐 不 醉

自動車が自動車に乗って走ってる  
生き甲斐の夢を孫にと木を植える  
一寸来い社長の笑顔に二度迷い

大阪市 西 川 誓 二

壺坂山

霊験記綾太郎節でバスガイド  
カローリーにその日の稼ぎ盛り込ませ  
故郷のイメージ交れど母在わす

香川県 岡 田 拳 法

雑草の発渾として春となり

働けば花は美し酒旨し  
枯木だから場所が空いてた花見なり

出雲市 尼 緑 之 助

寒暖不同花のあわれを見せつける  
浜の波世界をつなぐ色で寄せ  
公害の犠牲スタジオに引き出され

島根県 藤 井 明 朗

愛ひとすじに親馬鹿を發揮する  
しばらくは値上げにふれず花に酔い  
月末の計算へそくり忘れてた

兵庫県 河 原 みのる

雪消えて貧富は元にたちかえり  
折り詰めの鯛だけあすに待ち越され  
孫合わせて九人

就職大学高中小幼孫多端

大阪市 福 井 野 迷 路

人生の一の糸だけは狂わすまい  
剩さえ地球の顔も写しとき  
物価屋は女 賃銀屋が男

八尾市 古 川 鶴 声

何を祈ったと新婚話し合い

溝板を除けばミミズの慌わて方  
春霞匂いの中に有る茶店

岡山県 大森 娛句 楽

乗物で来た酒好きへ強られず  
爛漫の春を散る花開く花  
締めた気の財布が開く春競馬

奈良市 宮口 笛生

公園の広さで埋める奈良の春  
人波にパンピー躍ねるところがない  
若草山若さでのぼることにする

宇部市 平田 実男

居眠りをそっとしといてやる夜学  
甲子園スカウト意識して打たれ  
決められた簡素化守って非難され

岡山県 坂井 三葉

案内の旗を追うて旅行すみ  
英霊に濟まない国になり下が  
り  
神様に似たのが交りまとまらず

高槻市 山田 季賛

何億を紙一枚で支払われ  
給料日がちり貯めるプラン立て

鈍行で来て田舎の幸を賞め

玉野市 小谷 仙山

発表と噂ピッタリ合っていた  
潮干狩ざるの重味は苦にならず  
気の早いやつから花は散って行く

倉敷市 藤井 春日

足跡を残すに惜しい雪の道  
百姓が傾く老舗の買いに立ち  
南では売れッ妓だしたご寮はん

倉敷市 野田 素身郎

ライバルは二度も呼ばれた異動前  
半数は喜んでいる送別会  
餞別で払うつもりが辞令出ず

堺市 高橋 千万子

ゴミ箱は世帯ゆずった事を知る  
つけものをごちそうよりも先きにほめ  
宿ゲタの遠くへ行けぬ緒のゆるみ

竹原市 山内 静水

白旗かかげ鉄砲玉に迎えられ  
男のくせに電話のベルに助けられ  
真白なハンケチ芝生にひいてくれ

愛媛県 村上旭童

好きな事させてる顔で姉女房  
働けばもうかる銭はたかがしれ  
わらびまで売った小銭をせびられる

倉敷市 水粉千翁

催促へ添えた笑顔がきびしすぎ  
私へ祈る私を見捨てない  
しまいまで聞いて聞かせて親心

出雲市 弘津柳慶

物言わぬ娘と妻へおろおろし  
妻の留守昨夜の残りで出勤し  
過疎地帯虹が綺麗に円を画く

西宮市 野呂鵜汀

我が心見抜いた如くミニ座る  
酔えばもう花は桜でなくてよし  
一面に咲いて踏まねばならぬ花

倉敷市 小幡里風

さげて来た一本無理な事を云い  
咲く花が咲かずわたしに遠い春  
浪人の眼に風船が羨やまし

鳥取市 河村日満

謹厳のメッキが剥げた旅ごころ

晚酌へ道草のない歳となり

ビールを少しと二日酔い治りかけ

鳥取県 田中蛙眠子

四国ドライブ

桂浜時化よし龍馬の乱れ髪

雪があることが懐かし山陰に着く

天平の朱唇よ菩薩の恋憶う

ハワイ 上田紅溪

遅く出て無茶に走らす若い者

花祭り牧場の馬もはしやいでい

道端で雉も見送る禁猟区

富田林市 川端東雲楼

葉桜のすがすがしさよさみだれて

エプリルフル返り討ちとは知らなんだ

息子中学校長新任孫長男大学次男高校入学

まろやかに心も和む春の風

門真市 福島鉄児

市電全廃(一句)

身売りする市電車庫に詰め込まれ

逢えばすぐ騒ぐ若さの血がたぎり

打開けて見ればどっちも好きだった

宝塚市 小島無聖

切れかかる鎖をつなぐ紅を引き  
眼の色は何かがあったほつれ髪  
綻びたように女の声が燃え

下関市 国弘半休

生涯を用心深くアイク閉じ  
老衰の段々仏に似て静か  
信号で待たし信号で急がせる

愛媛県 渡辺曉童

血圧のことにはふれぬうどんずき  
うどんやの猫にも話すうどんずき  
腹立てて寝るよりうどん食うて寝る

和歌山市 野村太茂津

他人の為尽くして迷惑がられてる  
乱れたる心茶室で独り居る  
片手間に結婚するような主義を持ち

久留米市 永松道雄

人生の旅いそぐでもないに暮れ  
茶のかおり久留米がすりにしみて  
押し駄目引いても無駄な浮遊圏

亡妻をおもう(二句)

伊丹市 小川静観堂

うそと悔のほかに愛も織りませて  
矢拵の長刀かまえたような妻だった  
生きるかしら好きッ放しが一人あり

兵庫県 大江秋月

いいことがありそう妻がお茶をたて  
車窓から見ればもめてる市と見え  
行楽の中にささやかな我が家族

大阪市 宮地双楽

今日もまた無事に帰ったランドセル  
水ぬるむ亀の甲羅に陽がはじき  
故郷は墓だけ淋しくほっとかれ

松原市 谷垣史好

ほしがれいとことん搾取された貌  
名刺ふんだくって音沙汰ない話  
紫の衣へお布施包みかえ

大阪市 福井多蘭子

わが体病にまかせ春を待ち  
地下街の梅雑踏をふり向かせ  
みおそれない心境となる数珠をもち

札所巡拝雑感

京都市 松川 杜 的

巡拝の札所も桜のここを選り

一言の親切お守札も買わされる

札所への道その辺鄙さを嬉しがり

今治市 越智 一 水

子と妻のアクセサリーで行く花見

見合いた人がおったと妻笑う

主婦農業底辺ささえて考える

平田市 久家代 仕 男

石見路にて(一句)

章魚焼を阿呆臭う待つ列におり

事務所では手まめ家では懐手

探しもの塵箱漁る犬に似て

八尾市 高杉 鬼 遊

口を閉ず言うことなきにしもあらず

足るを知る花びら風に逆らわず

夫唱婦随ときどき逆にならされる

笠岡市 木山 遠 二

長生きをして誰彼に侮られ

床柱ただ齡ゆえに背負わされ

心なき花日曜を待たず散り

岡山県 田村 藤 波

当選のお祝い裏切った顔でなし

のんびりと寝ておる猫に腹がたち

お忘れ物はないかとチップに謎をかけ

広島県 高橋 鬼 焼

子の息へ丸みくずさずシャボン玉

咲きかけたつぼみにまよう花鉢

一日が治まるラッシュの歩にまじり

岡山県 池田 古 心

生きると云う権利に懊悩つきまとい

CMの歌で催促するお八ッ

晋山の堂ゆるがせる般若経

高石市 谷 沢 好 祐

どちらにも勝たしたいとは第三者

つき当るまでは行きます香車です

ふきんとおむつ一緒に洗う孫の嫁

岡山市 川 端 柳 子

マイペース一直線という自信

青春の素顔反旗がひるがえり

息子の運転免許取得

運転免許言うて聞かせることが増え

笠岡市 松本忠三

来賓にかくれて領収証貰い

迷い子を春風に乘せスピーカー

方言になじみ左遷が腰を据え

大阪市 河井庸佑

栄進へ黒幕動いた噂聞く

雪と花北と南の春日より

無理きかぬからだになつたをまたわすれ

倉敷市 木村千容

花花に浮かれて重い腰をあげ

若人のリュックに詰めた旅の味

またしてもとんちんかんで争える

倉吉市 奥谷弘朗

月へ飛ぶアポロ尻目に木を植える

小役人伸びることなぞ忘れて居

うるさ型圧えるための椅子にすえ

鳥取県 森田布堂

云いわけも刷って値上げのチラシ来る

誕生日家中が抱く児の重み

顔に帽子のせて土工の昼休み

東大阪市 竹中綾女

爛漫の桜見上げる瞳にゼット

二分咲きの桜見ろす句碑のどか

春雷を耳にテレビで花見する

東大阪市 森下愛論

一泊旅行に宿がえ程の荷物持ち

オバはんと呼ばれて女房忙しい

薬くさい看護婦さんとデートする

鳥取県 清水一保

転動になつて見直すお人柄

又一人巣立ってさびしい夕の膳

人間よ希望を持ってと花開き

松江市 小林孤呂二

御本家も昭和の代になり給い

赤旗へ白木蓮の散り添える

人間をうっとりさせ夕日沈む

大阪市 今西章雅

パパ抜きも忘れて妻は世話へ孜孜

じいちゃんも手すきはおしめ畳まされ

笠岡市 木山要次

父ちゃんに良く似て居るとモニタージュ

白足袋をお化けのような靴が踏み

松江市 柳 楽 鶴 丸

春の野に立てば貴女に似た野菊

再発で入院

召集令状よりも気軽るに手術台

松江市 舟木与根一

嫁きおくれ派手に着てまた嫁きおくれ

女の匂四十男の味を出し

松江市 岡 崎 祥 月

楽天家苦勞どっかへ吹き飛ばし

次ぎ次ぎと子にそむかれる星を持ち

京都府 清水谷 句楽坊

無縁碑に吾が未来像見付出し

前生の吾れをさがして八十路すぎ

守口市 村 田 瓢 太

昼下りの情事移り香まだ消えず

花の人出へ背をむけて糸を垂れ

岸和田市 葛城伊三郎

晴れ姿親は借り着の子を眺め

きれいな好きなれど燕に門を貸し

鹿児島市 土岐トク子

国なまり都会で小さく笑い合ひ

老いの愚痴上目づかいに嫁をみる

和歌山市 西尾公作

名残多し就職列車徐々に発つ

先客が課長で要件言いそびれ

和歌山市 土谷城石

伸びるだけ伸ばす名残りの色テープ

握り飯人目を避けて大きな口

和歌山市 垂井葵水

何処へゆく地下食堂の洗ひ水

人形になれない知性はがゆくて

加賀市 細呂木魯木

無理許り頼む地藏を掃除する

年上を上座にすえて議論する

東大阪市 竹中肖二

春の野の園児足並よく揃ひ

骨までは折れてませんとレントゲン

大阪市 横倉富久一

政治へのなげき一票では足りず

里芋のような親子になりたくて

島根県 福間清夢

春が舞う日射しの隅に俺も居り  
申し遅れましたと挨拶整える

★

北川春巢

大阪市交通局病院廃止決定(二句)

病院の死水をとる医者となり

大阪市立桃山病院長兼桃山市民病院長拜命(三句)

再出発かぶとの紐を締め直し

兼務兼務時間マツハの如く過ぎ

伝染病院空室ばかりそれでよし

セールスを帰し上手の妻となり

若本多久志

誌上に柳友の訃報頻り

櫛の齒の欠けるが如し無常感

いつの日か我が遺句遺影もかくあらん

学徒出陣その校門にヘルメット

老齡年金通知書とは悲し

俗臭紛々老醜の古稀哀れ

菊沢小松園

饒舌の花の季節の女たち

花を追う蜂は故郷の山を見ず

ままごとも小さい世帯より知らず

雪解けの水のかたちに萌える草

患うても季節の花は絶えさせず

清水白柳

九州にて

鈍行でなきやたのしめぬ駅の桜

阿蘇へ来て阿蘇の見えない湯に浸る

露天風呂湯滝を勿体なしと見る

演芸を見て湯ざめした山の宿

川村好郎

よく愚痴る人だと顔を見てるだけ

遭難のニュース批判の目で見つめ

値踏みなどしてはすまない遺品分け

人來れば来たで春宵らしく酔い

そむかれて己れみつめる掌を合わせ

西尾 葉

春うらら雀繩とびしてるよう

水車春の光をこぼしけり

愚痴のよう奥さん言うて自慢なり

天ぷら屋この腕という長い箸

べ切りは手形のように迫るなり

# 川傍柳 初篇研究

(七十二)

前田喜代人 川端柳風  
 岡崎重義故 高須唾三味  
 清 博美丸 十府  
 藤井和雄 岡田 甫

558 勅答がすむと太鼓を廻す也

榊水

清 不解

藤井 菅原道真死して雷となり内裏に落雷すること数知れず、天皇恐れて天満天神と贈官されたので「菅原相うれしや生きての恨、死しての悦びはまでと黒雲に打ち乗って虚空にあがらせ給ひけり」と謡曲「雷電」にある事件ではなからうか。即ち贈天満天神の勅答を得たとたん雷雨一過を太鼓を廻す也といったのだろう。

高須 勅答」という言葉は、天皇から何か聞かれて、それに答えるという言葉だがサテこの場合何であるうか、思い当らぬ。

丸 勅答」は高須説の如くであるが、太鼓を廻すがわからない。柳雨翁は「禁中の

角力かと思えど？」と云っているが、相撲節（相撲節会）にふれ太鼓を回したことがあったか不明。かといって他に謡曲「太

鼓」玄宗皇帝など考えてみたがはっきりしない。

岡田 勅答は高須説の通り、帝の勅に対して答えること。（質問ばかりでなく、帝の命令や御依頼に対して「畏りました」という場合でも）やはり本句は藤井説の謡曲「雷電」を詠んだもの。但し勅を受けたのは菅公の師、比叡山の法性坊である。菅公も比叡山へゆく。二度はおことわりしたが三度目にやっと承諾の勅答をして宮中へ参内、祈禱をして雷電を退けた。太鼓は雷神の腕の太鼓である。

559 昼三の一ト足よじるにわたずみ

榊 弓

清 昼三という下等女郎だから、水溜りをよけるにも、品がなかっただ一ト足よじるだけ。

藤井 昼三の句に

昼三をかったか鼻へぶらさがり 一〇・10  
 昼三を買かゝったが因果なり 八・8  
 昼三は甲の座に居て売れ残り 一九・23  
 昼三は残って恥にならぬもの 二二・27

のように安女郎ではない。広辞苑には昼夜三分の安女郎と書いてあるが、三分とは大金だから上妓と思う。昼三を昼夜三分とあるのもおかしい。昼三は昼だけで三分の上妓の事の誤りだと思ふ。従って清説とは反対に、品よく一足よじて水溜を……それもちよつとした水溜を越したと解している。女らしいつつましさ強調した身体のしぐさ、さすがにオイランだとの賛辞と見たい。

川端 藤井説賛。昼三の大夫で女郎中では最高位。昼夜とも三分で一日の揚代は一両二分。次が三分の女郎で昼夜で三分となる。大夫に優る全盛をきわめたほどだから一ト足よじるとは品をつけていると解した

い。

高須 三は昼夜三分で（昼夜とも三分、  
昼夜各三分ということ）吉原で最高の遊女  
だから「にわたずみ」（雨が降って地上に  
溜り流れる水。俗にいう水たまり）をよけ  
るにも品よく一寸一足よじるだけだとい  
句。

星三を生酔の時買はじめ 一三・14  
で、普通町民ではちよつと手が出せぬ。  
星一にしやれと母は一步かし 一九・3

で、息子の遊びなどには高すぎるのである  
丸 藤井説以下諸説に賛。「にわたずみ」  
と雅語を用いたところも、句品をそなえ  
ている。

岡田 同。

560 四五文が花火暮るを待かねる

龜 遊

清 いたとえ安っぽい花火でも、早く火をつ  
けてみたいが人情。

花火を貰ひ日がくれるく 一七・44

高須 両国の花火などは屋間からポンポン  
あがるが、四五文のオモチャ花火では、日  
が暮れなければ全然面白くない。暮れるを  
待ちかねるとはそのことであるが、売れる方  
はそうはゆかぬ。現代句にこんなのがあ  
客あるが無かるが花火あげている 炭車

丸 贊。花火を買ってもらった子供である  
岡田 諸説に賛。

561 郭公時 羽根を出して飛び

眠 狐

清 不明。

藤井 二「ほととぎすなきつる方を眺むれば  
ただ有明の月ぞ残れる」で郭公は声だけで  
なかなか姿を見せぬもの。従って、運よく  
見た時の気持ち「時々羽根を出して飛ぶ  
やはり郭公だナ」と感心した所か。逆に云  
えば「郭公常には声だけで飛ばぬなり」

川端 贊。菅公、後徳大寺、千代女などの  
歌にもあるように、郭公は声だけでもな  
なか聞けない。まして姿を見ることが稀で  
あるので、雲の上に居ないときは羽根で飛  
んでいると洒落れたのである。

高須 二ホトトギスを神秘的な鳥と想っていた  
江戸時代には「鳥だから羽根」の原則を忘  
れて、ホトトギスはジェット機のように空  
を飛ぶと考えていたらしい。だから、あれ  
がホトトギスさといわれて見た鳥は「羽根  
で飛んでいた」という当然のことにおどろ  
きを発見した句と思う。ただ「羽根を出し  
て」が一寸ひかかる。現代なら  
ホトトギスやっぱり羽根でとんでいる  
というところだが……。

前田 二「時鳥月をかすつてないて行き」  
（二四・34）と共に、写生句の佳句でその  
まま素直にうけいられる。

丸 高須説以下賛。時々羽根づかいしては  
スーと飛んで行くホトトギスの生態をよん  
だもの。

岡田 二ホトトギスの矢のように早く飛ぶ姿  
を描いて佳句。

562 齋うりあるひて来たが元ト手他

眠 狐

清 齋は正月七日の七種かゆに入れる七草  
の一種。「守貞漫稿」によると、六日に困  
民や小農が「なすな・なすな」と売りに来  
たのを買って七種粥をつくったとのこと。

摘草の商売人はみかん籠

一三・36

なすな売り此上ねぎるところなし 一〇・34  
此頃の雪でときばるなすな売 一三・14  
などと、ささやかな商売であった。

高須 二俗に「べんべん草」といわれる春の  
二年草、ふだんは雑草だが、七草の時期に  
限り売られる。だから元手なんかかかって  
いない。有名な古句

草市ではかなきものを値切りつめ 三・15  
が思い出される。佳句。

丸・岡田 同。



# 雨つれづれ

金井文秋

六月と云えば日本の雨期にあたる。毎日うっとうしい日が続くのだが、この雨が降らねば百姓の生活に大きく響く。昔は死活問題から水争いなどがよく起つたものだ。これ程大事な雨でも、一般の人にはゆううつなものの一つだ。特に病氣のある人には嫌な季節である。神経痛や古傷が痛みだしたり病氣が進行したりする。

雨だれは肺の中までぬらすなり

幽王

病身であった幽王さんをよく知っているだけに、私の胸にもジンと来るものがある。同じ雨でも春雨となると色気がある。

春雨へ女房と濡れるあほらしさ

好郎

芝居の名せりふ「月さま雨が」「春雨じや濡れて行こう」こんな事を頭に描いていたに違いない。

春雨も乙なものだと雨が洩り

万古

春雨の情緒を楽しむのも結構だが、雨の洩りには困ります。だと云って少々の事ぐらいで職人さんも仲々来てくれませんか。

雨の日ははく靴がなく本を読みぬれて行くのは軍服が役に立ち

白柳

この句を見ると戦後の窮乏時代を思い出す。私も徴用の時に一足の長靴を配給されたが戦後しばらくは貴重品のように思えた。それから二十余年国民の生活も随分と変つて来た。

雨が降ろうと失業保険支払日

侃流洞

これは生活がかかっている。雨であろうが雪であろうが、きめられた日時に行かなければ保険金は延ばされてしまう。現在はさらに厳しくなっているようだ。

旅の雨となると又風情がある。

京の雨明治の音を聞く心地

高志

旅の雨しばらく女中が話しに来

紫香

雨の宿山を眺めるばかりなり

緑雨

こうして見ると雨も仲々風流なものだ。趣味のある喜びをじっくりと味わいたい。

雨降れば降ると二階仲がよし

潮花

旅でなくとも、こう云う雨の楽しみもある。

誰もこんな時代もあったのだろうが少し妬けますな。

雨で一番困るのは俄雨だろう。傘を持たない時には心ならずも軒下のご厄介になる。雨宿りちよっちよと出て濡れて見る

古川柳

早く小降りにならないかなと、濡れに出て確認して見るのも心理と云うものだろう。

夕立ちへ遂に散髪刈ってゆき

南柳

ちようど散髪屋の前で雨宿りしたが、仲々止みそうもないので散髪でもして行こうとあきらかに腰を据えてしまったのだろう。

商店街などで雨に逢えば本屋へ飛び込むのが一番良い。退屈はしないしあまり目立たない。ひやかし客に交じっていればよいのだから。それでも悪いと思つてか、帰りに一冊の本でも買って帰る人がある。

立読みの中に止んで傘忘れ

文秋

本屋では間の日も立読みが多いが、雨の日など、あつさり止んでしまうと、つい傘を忘れてしまふ。私も立場が逆になれば、忘れっぽい方だから人の事は云えない。これは私自身の姿でもある。

春雨もH<sub>2</sub>Oに変わりなく

十九平

雨は見る人聞く人によって風情があり、また喜怒哀楽をも伴なうものだが、さみだれであれ春雨であれ夕立であろうとも、流れてしまえば唯の水である。

つまり酸素1水素2の化合物であると化学では割切っている。こう云う見方をすれば雨もなんと味気ないものよ。



## 雨

### 直原七面山

も言われぬもの淋しさを誘うものだが、あのリズムの中には、それとは別に、人の心は大いなる安らぎを与える力のあることを私は前から知っている。

#### 春雨に墨絵のような京の街

雨の京都は一種異様な情緒と雰囲気をかもし出して旅人の心を慰めてくれる。

そして雨にむせぶ京は、なんのためらいもなく現代のヴェール、マスクを脱ぎ捨てて、

一瞬にして大古の姿をさらけ出す。

そこで道行くミニスカートの乙女が、その古代に対して脚線美をもって挑戦を試みるのだが、所詮はかなわずしてそそくさとうす煙

の中へその姿を没し去ってしまう。

京を包むこの摩可不思議な雨の現象に旅人はただただ驚くばかりである。

#### 美しき雨美しき女通る

雨の新潟で新潟美人の姿を見つけた。恋をしたい女であった。そして妻にめとりたい女であった。

#### 旅に來て雨は淋しいものと知り

遠い遠い昔。私は名も無き町の名も無き宿に一夜を明かした。

そうだ、あれは確か睦子との恋に破れた直後であった。そして所は南国土佐。

窓の外に女の声を聞いたような気がしたのでそっと窓をあけた。

外は雨であった。果てしなく降りしきる雨

雨は好きだ。だから雨に関する句はかなりあるだろうと思って探がしてみたが、案外少ないのには驚いた。

#### 七面山留守だよと吾子胸を張り

の長男が六才で逝き、その葬儀は篠つく雨の日であった。

#### 傘さして淋しく行った子の柩

私は重い病の床からやっと起き上った妻と共に、二階の窓から淋しく雨の中を行く我が子の柩を見舞った。

#### 雨雲へ男の方から腰を上げ

肩寄せて時雨に頬を濡らす恋晴雨など論ぜず二人は逢いつづけ

雨烈しと云うて逢わずにはおれず夕立のように襲って来たキツス

恋に関する雨の句もまた少なかつた。

夕立へ素知らぬ顔でいる金魚

金魚のように、常にマイペースを崩さぬ度

胸ある男に私はなりたいたと思った。

そしてその結果が

雨の日は運出の出来る良い身分

にでもなればこれに越したことはないとも。

#### 破顔一笑田植の雨が降る

干天に慈雨の有難さが判るのはお百姓の外

にはあるまい。正に黄金の雨だ。

そして雨の悲しさ、雨の嬉しさが判るのも

#### 愛妻の天気予報へ傘を提げ

雨は降らなかつた。ゴム長靴にコウモリ傘カンカン照りの街中を行く男の姿はどう見ても滑稽だ。

が、例え他人の目に滑稽に写ろうとも、夫婦が幸せならば、これに超した事はなかるう

物思う身に雨垂れの音も良し

生活に疲れ切つて、あれこれ思い悩む身にポツンポツンと落ちて来る雨だれの音は、え

に果て無くつづく闇。私はその時生れて初めて雨の淋しさを知った。

雨!!雨!!雨!! 雨は私の恋人だ。



## 雨ざらい

傍島 静馬

さる詩人は雨をうまく美化して結構愉んだりしているが、ぼくは総じて雨はきらいだ。暗くてうっとうしくもの二日も続けば、あたりはじめじめするし駄はもとより心までしめっぽくなり全くやりきれない気持ちにさせられる。昭和二十八年二月に川柳をはじめて以来、自作何千句の中にも雨に関するものはほんの僅かしか見当らないし、雨ざらいだけあってそれも駄句ばかり、そして雨そのもののようなしめった感じのものばかりだ。

雨つづき花輪は後ろ向いたまま

夫婦共稼ぎで屋台のおでん屋から念願叶い狭いながらもやっと一軒構えることができ、準備万端OK、大安を選んで花らしく開店したものの、相憎く天気予報があたり当日も朝から梅雨のような雨しかも書入れの八時ごろ

にはいよいよ本降りになってしまった。景気づけに飲みに行く約束だったばかりも遂に顔を見せずじまいだったが、後日夫婦から聞いた話では予定の三分の一も客が来なかったと大いにこぼしていたがちよっと気の毒な気がした。

あじさいも田植も一と雨待ちわびる

干天続きに連日庭の水やりは一仕事だが、庭木や園芸に一向無関心な妻は、水がもったいないなどと水道局員のようなことをおっしゃる。それでも時々自分の代りにやってくれることもあるが、それこそ云いわけのように地表をそっとぬらす程度で殆んど利目が無い、だから専ら自分がやることになるわけだが、松や山茶花など常緑木はさほどに感じないが、水をよく吸収するあじさいなど日照り

にぐったりした風情を見てはじっとしておれないので、夕方を待ちかね放水をはじめめるわけだが、特にあじさいには他のものより余分に水をかけてやる。しかしいくらやっても水道の水はあくまで水道の水であり雨水ほど効果は無いようだ、と云って一日も欠かさずわけにはいかないから厄介だ。こんな時の一と雨こそ働い千金、久しぶりに大地は甦り喜喜として貧欲なまでに雨水を吸い込む、正に干天の慈雨、これで庭の水やりも大いに助るが田植を待つ農家の喜びもさこそ思われる。

待望の雨が田畑を押し流し

兎角世の中はうまくいかぬもの、干天つづきにあれだけ待っていた雨だが、降るは降るは、雨期でもないのに今日で三日目しかもはげしい吹き降り、庭には時ならぬ池や小川が現し出す。ニュースはさっきから四国や九州地方の暴風雨に因る家屋の浸水、田畑の流失など生々しい被害状況を次ぎ次ぎ報じているが念願の雨も程度に降って欲しいものだ。

長雨に三味も芸妓もしめり勝ち

芸妓の独り言!「こんな時にスーさんでも遊びに来てくれたらなあ」ナイトクラブやバーにお客を奪われてしまった今日このごろ、たださえ閑な芸妓たちにとってこの長雨はいっそうやり切れないものだろう。

所在なさに爪弾く三味の音も冴えないやるせなさ



## 路郎先生と雨

不二田 一三夫

こんなもの憂い気持で雨の毎日を持て余す芸妓も哀れだが、抱え主の女将は一層辛いことだろう、来る日も来る日も深刻な顔で事毎にハツ当り、遂い遂い憂さ晴しのコップ酒に手が延びるといふもの罪な長雨ではある。

雨ほどはニコヨン月末気にならず

世はイザナギ景気とかで、有るところには有り、忙がしいところは忙がしくわが世の春を謳歌しているが、いつの世にもうだつの上

らないのは余猶のない小企業だ、親会社や商社筋からの集金を下職や小払いに充当してのやり繰りに集金の良否が直接あとの仕事に影響するから月末は必死に集金に駆けずり廻らねばならない。これに比べて日ゼにを稼ぐ日傭には節季も月末もないから一応は気楽だ、だが日傭にもこわいものがある。それは仕事にアブレる雨の日である。

あの強気一本の先生も、やはりお年には勝てなかったようである。

「すみませんね、何度も……」

カラ足をふむたびに蔑乃先生もひじように気をつかってくださる。そんな時には、こちらのほうが恐縮してしまった。

先生は原稿用紙へ書かれず、いつも句の清記用の片ザラへ埋めていかれるので、脱稿されたものを一字ずつ数えて組まねばならないため、組むのにも相当時間をとられた。今、ボクは四十六行埋めているのだが、先生はこういう仕事のやり方は、あまりお得意ではなかった。

先生と雨は何か宿命的なものがあつたようである。句集「旅人」のなから雨の句を拾ってみても十句よりない。

- 彼の一生は雨々々のままだった (一四〇)
- 落ちついて飲むは雨傘持ていず (一八八)
- 雨風が逢いたいところつらせる (二五四)
- 子が出来て傘の迎えが来なくなり (二七八)
- 俄雨ジョッキ一つで待つつもり (四七八)
- 泊り客雨で枕をあてがわれ (四八七)
- 広告塔一と雨降った中に立ち (六四一)
- 天皇へ雨も埃りのたたぬほど (六五五)

東京

時雨れるる銀座に亀屋鶴五郎

(六九五)

雨の松本にて

遠く来て信濃に山のない日なり

(六九七)

「川柳雑誌」時代、生野から帝塚山へ月のうちの半分はゆき来したものである。

故路郎先生は六月という月がおきらいだった。

「書けないー雲が、頭の上へおっかぶさってくるようだ」

雨模様灰色の空がつづくときまって原稿が遅くれるのだ。今だから云えるのだが、先生の原稿のために雨の多い月は、雑誌の遅

くれることが再三だった。

「すまん」

先生は、ボクの顔を見ると、心からそう云われるのである。ボクのように、天候不問、場所をきらわずという雑文屋なら、五枚や十枚はなんの苦痛も感じないのだが、先生の編集後記だけで三日間も通ったこともあった。

「むかしはひと晩に三十枚くらいは飛ばしたこともあったのだが……」

# 恐妻アラベスク

東野 大八

今東光が参院選運動で岐阜へやってきた。別に会いたくもなかったが、折よくその休憩所にあてた旅館で私が飲んでいたので、トイレの戻りに顔を拜見しにいった。十人ほどの取巻を相手におでんの午旁巻きみたいなセンセイが大いに例の調子で与太ってござった。話が一切りついたところらしく

「遠藤武者盛遠にホレられた袈裟御前はその盛遠と寝たと思うか、寝なんだと思うかどうか、うじやな、あんた」

と、傍らにいる岡潔みたいな老人にきいてい

る。相手はそれを持て余して困った顔。袈裟御前は、一度だけ盛遠に抱かれてシビれているんだ。だから亭主の渡辺亘の身代りとなり、その首を盛遠に切らせたのである。私は若いときから固くそう信じて疑わないのである。でなきあ、この三角関係は味もなければ、色もない。よっぽど岡潔風の爺さんにかわって答えてやろうと思つたが、この坊主のファンとまぢがえられそうなので黙って部

屋へ帰ることにした。

貞女とは一体なんだ。今東光はおそらくこの日も、美女で烈女のユードットの話をぶつたのにちがいない。どこかの週刊誌で、彼は世界一の貞女はこのユードットだという風に激賞していたからである。

ユードットは素裸の上に毛皮のマントを羽織つただけで、敵将ホロフェロスの陣営を訪れ、よだれをたらして見とれる相手の隙に、その首をかき切つたのである。博識の今センセイが、そんな彼女を世界一というのは、私にすればうなずけぬ。中国びいきの私なら、ユードットより後漢の絶世の美女貂蟬を推す。無道の逆臣董卓を、そのボディガード呂布に斬らせている。逆賊同志を色じかけで殺し合ひをさせたその才覚は、ユードットの比ではない。ただし彼女は人妻ではない、随つて貞女に非ず。しかしながら義に殉じて烈女であることはまちがいない。銀座裏の高級バターのマダムにこんなのがいるといわれればそ

れまでだが、それでは彼女の「連環の計」が泣く。

世に貞女という言葉があるが、これは易経から出ている。易六十四卦の二六基本は乾（天野）と坤（地野）だが、その坤に「女は牝馬の貞によるし」とある。貞とは何んぞ。「メス馬は常に要心深く、先頭に立たず、前進をせせらず、かたくなに忍従の心がけをもつ」とある。だが、女たるものこんな殊勝な貞女ばかりではない。貞にも六野あつてちゃんとしてやじや馬の存在を忘れない。その六野の中に姤（こう）がある。それにいわく女壯勿取女（女のさかんなるなり、もつてめとるべからず）教訓して言う。「その角さかんなり、吝なれどとがめなし」要するに女に角（ツノ）が生えているような強さのときは、逆らわぬにしくはない。さわらぬ神にたたりなし、というわけだ。りんきに角を生やすという日本のコトワザはここから出た。このかたつむり女房を恐妻という。

易は中国四千年のむかし太古のころ、亀の甲羅を焼いてそのヒビ割れで吉凶を占つたのにはじまるが、その原始的易占の中に、すでに恐妻のケがあつたのだから、日本世界は面白い。その恐妻第一号は姤城で、日本のスサノオノミコみたいな荒つっぽい神様の女房だつた。その亭主の羿（ひ）というのが、西王母から不死の仙薬を買ってへそくり、恐妻から逃走しようとして企んだ。それを察知した女房が、その仙薬を盗んで飲み月に昇つてうさぎとなつた。口惜しがって拜いわく「ひとりになれて

まずはよい。しかし奴とおれとはアベコベとはね」どうも女のさかんなるは豪傑もかなわぬらしい。

「聊齋志異」に、夫を半殺しにぶつたたかねばめしがうまくないという猛烈な悪妻の話があるが、中国の細君は夫婦げんかをやらかすと街頭へとび出し、公然と亭主や家の内輪の悪い癖がある。

### 坐るとこみつけ纏足いつのり (天弓)

という大陸吟の名句がある。詩人蘇本坡は、わめくそんな女房のさまを「獅子吼」といつて戦慄の意を表している。この故が、彼は極度の女嫌いでホモに走った。

一体妻とは何んであるか、漢の「白虎通」には「妻とは齋である。夫と体を等しくするが故にかく言う」とある。古典もの一つ「礼記」に拠るときにあらず。天子様の女はワンセット百二十人が最低基準で、皇后、夫人、嬪、世婦そして御妻と階級性があり、妻と名のつきののが最低で公定八十一人もいた。皇后が型通りなら本妻だが、妻とは呼称されていなかた。天子様の下の王公、大臣は、百二十人から一割見当間びかれてだんだん下へ落ち、平民におよんでやつと御妻がむき出しになって残り、その下に妻(二号)がくつついた。腹は借り物で、女はあくまで男の畑(ハタケ)にすぎない。明の「大明会典」に「平民は齡四十にして子がなほ場合は妻に諮らずとも妾をおくことができる。これにさかからう妻は皆四十とする」てな法令があつた。

亭主にとっては涙のこぼれるお達しだが、妻たるもの人権侵害も甚しい。こんな世相であつたころ夫婦そろつて神に願かけをした。

「麻布は百束まで」といふので亭主が「少なすぎる」と叱つたら、妻は「それ以上だと貴方は二号をおく」と答えたという。

女卑極つたこんな時代に、平原の陶というのが才色兼備の美女を妻とした。ある日、彼女の母に会い帰宅すると早速離縁状を書いた。話がわからぬので妻がなじると、彼は

「そなたほどの美女も、齡をとるとあの母御とウリ二つになるのだと思うと、とても一緒に暮らす気にはなれん、それで離縁する」

これは中国の諷諭文章のはしりといわれる。「笑林」にある話。ところがこの逆もある。

### 釣れますかなどと文王そばへ寄り

の古句で知られる太公望呂尚は、齡六十になつてもうだが上らず釣りはかりやつていゝ。その貧乏と男の甲斐性なしに業をにやした女房が彼を離縁して追い出した。これを「出夫」といふ。貞女の時点で京主をおん出すのだから恐妻一いや強妻にちがいない。ところが呂尚がヤモメになつたとたん、文王に召し出されて一躍宰相となつた。しまつたと悔んだ女房が復縁を迫つたところ、呂尚は盆に水を入れてもつて来させ、それを地上に撒いて言つた。「覆水盆に還らず」と。

哲人管子は、その「入国篇」で、未亡人は寡婦というが、男の場合は寡夫といわぬ(かん)という一と定義した。再来後家は寡

婦となり、夫はヤモメ(かん)と公称されるようになったが、かんといふのは中国南方にいたればぜ科?の大魚のことで、この魚はいつも独り夜でも眠らぬ汚いしろものだという。管子も人が悪い。易经によると「寡」は「三人で行けば一人がはずれ、ひとりで行けば必ず友ができる」といつている。このイミからして

### 三人の話二人になつて嘘 (蛇の窟)

を私は名句と推す所以である。

貞婦二夫にまみえずの儒教に反発したヒューマニスト愈正は

生きた女も追いつめられ

胸にみちぬ切ない恨み

女が死ぬと一族は喜び

表彰を乞うて家名を伝える

朝には三丈の華表が門に立ち

夜には魂を返せせと亡霊の音がする

との詩章を書いている。そのかみ私も戦時中に、軍国未亡人の境遇に同情し、女体人間説を新聞のコラムに書いたら、憲兵隊からサイドカーのお迎えをうけた。

いば蛙の夫婦は、片方が死ぬとそのつれ合も忽ちして死ぬという。亭主が死ぬといふ。亭主が死ぬとき妻も死ぬ、私もこんな夫婦でありたいといえは歌謡曲の「花と蝶」だが、その前提となる基盤は、メス馬の如きいば蛙であるということにある。いや、こう申せば易(剝六二)ではないが、雀大水に入つて蛤となる一と人はワラうであらう。

# 秀句鑑賞

：前月号から：

## 家庭教師の居眠りを起さない

中内 孚彦

現在の大学生はレジャーのためにアルバイトをすることが多いことだが、この家庭教師も別のアルバイトの口を持っているのであろうか、中学生位いだと比較的に気が楽なので、一生懸命に何かを書いているその横で居眠りをはじめたのだ。そっとのぞきに来たママが「そっとして置いてあげなさい、疲れていらっしやるのですよ、おかわいそうに」という状態が目に見えるようだ。居眠りをして居るのが作者自身だとすると尚面白い

## 肩書きはいらぬさんま裏返す

奴田原紅雨

誰れでもが肩書をほしがる世の中にこれはまた無欲な人間もあるものだ。こんなのを偏屈な男というのだろう。ひとり暮らしの気楽

## 清水白柳

さか、夕食のさんまを焼いているというのが句にあらわれた表面のことなのだが、作者はそのイメージを通じて人間の弱さを批判しているのである。そこにこの句の深さがあると思われる。

## わが坐すは弥陀の膝なり策無用

麻生アート

精神的なよりどころを求めるのは趣味である、宗教であれ帰するところは一つであると思う。弥陀の膝に坐している安心感、それは何物にもかえがたいものだ、だから人間的な小細工を試みたところで何にしろ。ゴーイングマイウェイ、作者の前にあるのは只一筋の白い遠い道だけなのである。

## 石仏の羞恥乳房に雪が触れ

垂井葵水

相当風化した石仏に豊富な乳房を感じさせるのはその彫刻の見事さを物語っている。そして一ひらの雪がその乳房のあたりを撫でるのを見て、作者はその乳房に触れた思いがしたのであろう、羞恥を感じたのは石仏でなくて作者の心の奥にあるエロチシズムのためなのであろうか、よい描写だと思った。

## はらんでる蛙をよけて畑を打ち

三宅ろ亭

蛙の雌が産卵するとただちに雄がその卵に精液をかけ、受精がおこなわれる(百科事典)と書いてあるので、卵を持っているメスの蛙を、はらんでる蛙といったのであろうかとにかくはらんでいなくても蛙をいためないように畑仕事をしたという作者にこの句のよさを感じた。無神経になり勝ちな都会人に一矢をむくいたところ。

## 冬眠もしたかる紙幣のくたびれて

小谷葉子

先日九州へ旅をした時に感じたのは百円硬貨が殆んど目につかなかったことである。その時おつりにもらう百円札のくたびれたのを見てこの句を思い出していた。千円紙幣や一万円紙幣にもくたびれたのがあるのだろうが私の目にうつるのは百円ばかりだ、そうした

事で余計に百円紙幣に対するレンビンの情が測々として胸に迫ってくるのを覚える。

### 不完全燃焼で中年の恋

金井文秋

言葉の使い方がこの句が面白いものになっている。中年の恋の危険度を不完全燃焼であらわしたのは作者の手腕である。一家心中、自殺、中毒死の新聞記事には例外なく不完全燃焼が一役買っているのを見ると、中年の恋の将来を暗示しているようでもある。

### 傷痕にふれる話の輪から出る

八木千代

この傷痕は胸の疼くものではあるが、取り返しのつかないような深いものではない。例えば幼ない頃の初恋のものがたりのように、ほのぼのとしたものであろうか、輪からぬけ出したのは耐えがたいから出たのではなくてその想いをこわされるのをおそれたためだろ  
うと思いたい。

### 不幸中の幸 金持に轢かれ

安平次弘道

私はいつもこの句のようにピカピカの黒塗りの自家用車にはねられて死にたいと思っ  
ている。それは後に残ったものごとを考えて  
このことで、理想通りになるかどうかはなっ

みないとわからない。この句はそれをズバリ  
と言っていてくれるのがうれしかった。

### 放っとけばよいのに救済隊を出し

森本法泉子

冬山遭難の記事が今年は特に多かったよう  
に思う。マスコミはいつもその県知事などが  
具条令を無視してまで無謀登山するやからに  
手を焼いているとのせているが、そんな奴は  
自殺するのと同じだから放っとけばよいので  
税金まで使う必要はないと思う。これが一般  
人の偽らざる気持ちであろう。

### 一億やがて総ヘルメットガスマスク

河原みのる

公害基本法とかいうものが出来るとか、い  
や出来たのかも知れないが、その法律が効を  
奏するようになるまでには何年かかるか判ら  
ない。通勤通学用ガスマスクなどという小型  
のものを特許申請して置いても遅くはないと  
思うがどうだろうか。

### 心齋橋夢のつづきを見に出かけ

西出一栄

人間の欲望は限りのないもので電話一本で  
何でも取寄せられるのだが、それでは気がす  
まずあれも見たい、こんなものも見に出か  
けるのだが、それを夢のつづきと詠んだとこ

るに作者の心がある。

### 町内に住んでテレビのお水取り

村上春巳

何年前かに会陽のはだか祭りの句会に招か  
れた事があったが、その夜もクワイマックス  
は川柳家のところでテレビで見た。その時も  
これと同じことを聞いて、その現場のすさま  
じい人出に圧倒されたあとなので成る程と思  
ったものであった。

### サービスの限界人妻としての距離

菊沢小松園

大正の頃の有名な言葉に鳩山薫子夫人が選  
挙運動のとき「貞操以外のことなら何でも致  
します。どうぞ主人に一票を」と言ったと伝  
えられているが、現在の女性、殊に人妻にそ  
の限界の認識があるのだろうかと思わせるよ  
うな出来事が多い。この句は所詮明治人の感  
覚だと言われても仕方がないようだ。

### 秋田実主宰・不二田一三夫編集

### 「漫才」

増ページしました  
定価百円送料六円

発行所大阪市生野区勝山通六ノ七九

電話大阪(七七八)三三二一八

# 舌の効用

高 鷲 亜 鈍

人間の肉体は、頭の指令がない限り動かさない。しかし、時と場合によつては、頭の指令を待たずして、無意識的に四肢を反射神経で動かす。とは云うものの人間の肉体は、頭からの命令をなかなか聞かないもので、むしろ大概の場合、頭の考えとは、うらはらな事許りしでかす放埒もない手足どもである。

私は最近、つくづく気付いて驚いた事には人間の舌程、頭の中で意識する事、しない事迄も、打てば響く様に行動するのを、小気味良く思った事はなかった。私達が日に三度の食事を取ったとすれば、一番活躍するのが舌の働きである。良く咀嚼する為には、舌は獅子奮迅の働きをして右や左の奥歯へ、又、魚の小骨等は前歯の方へと撰り出すのである。そして餅や飴が、上顎にくっつくものなら懸命の努力を払って外すのである。

私は近頃は知らないが、以前、形水が社長

である会社へ行った時、テーブルの上にいっても南京豆が、菓子鉢一杯に入っていて、それをその場に居る社長や専務と一緒に口にしたら。一寸可笑しい風景ではあるが、その頃、社長も専務も禁煙していたため、口淋しくて客の持てなしというより、自分達の嗜好物として、置いてあったものであろう。勿論私も煙草は吸っていても大好物であったから、南京豆に手が出てとどまる事もない。

近頃、一日中座って煙草を吸う許りでは身体に良くないので、好きな南京豆を口にすることが、ここで気付いた事には、舌は食事中だけ働くものと思つていたけれども、このような南京豆の硬くて直ぐ歯で噛み砕ける物に至つては、舌は一粒一粒丁寧に奥歯の方へ持つてゆき、ベルトコンベアーになつて喉元へ運んでくれる。そして歯のすき間に小さくなつた豆のかけらが、はさまっているようなら、実に器用に舌の先が、取り去ってくれる。この実直である舌には我ながら参つた次第である。それから次々と舌の効用について考え出したら全くきりがなく、言葉の発音は、舌の胴の所を上顎へもつていったり、先端をつけてみたり、まるめてみたりして、言葉にするのであるが、これは当然の事ならがつくづく舌の有難さが分る。にもかかわらず、詐欺をしないでかす様な奴の頭の指令があるところの忠

実な下僕は、主人と同じく悪者にされて、二枚舌を使いやがると、眨され、死んではこの嘘付き野郎と閻魔さんから、怒鳴られ、挙句の果て、大きな釘抜きで舌を根っこから引き抜かれてしまふとは不憫な話である。

★

どっちも生き生るも虚栄死も虚栄  
尾道市にも黒い霧やら黒い渦  
選挙終つたらケロリとする町の顔  
明るい句暗い句どちらが良いかぶちまける  
老らくの恋のできない羽目になり  
これでもいのちから二番目の句が生まれ  
千切雲泪しずかに石ぬらす  
帆柱をおろしてくろい海に眠る  
やりきれぬ気持へ要らぬ礼を云う  
弱い者いじめしているプロ世界  
現実は道理に適う蛭動く  
引裂けば血の匂いするくろい幕  
惜別に白の衣裳とはきびし  
醜悪なやもり白い壁にいる  
忘却をぬりつぶして白の壁  
月夜だから影おとしてる白の道  
スイスイと蜻蛉墜落せずにとぶ  
スイスイと空がとべたらなとおもふ  
盲同志君は君僕は僕がち  
盲同志は盲同志は歩くもの

# 私のメモから

吉田水車

## ○緑亭川柳のこと

「子規俳話」の中の一文によると、緑亭川柳なる人が居て専ら俳諧の編集、発行をしていた。その主なものに「俳人百家選」があった。安政二年に出版されている。と記されているが柳翁のほかに緑亭川柳と言うのは五世川

柳水谷金蔵が名乗っているだけで、この「百家選」の編集者の川柳は同名異人であることは柳翁の歿後六十五年に当る安政二年に出版されたことからみても判る。ただ多少それらしく思える節としては柳翁の前句付に志す以前に俳諧修業をしたと言うことから考えるとこうした文芸活動も全然なかったらうか、何れにしても「俳人百家選」の編集者緑亭川柳は全く別人だと考えたいのである。

## ○竜宝寺のこと

(岸井良衛著江戸町づくしより)

柳翁の眠っている東京蔵前の天台宗竜宝寺界隈はその当時にはずいぶん沢山の寺があった。この外に同名の寺が二カ寺あって一は禅宗、他は浮土宗である。天台宗竜宝寺門前町を流れる新堀川に架かる橋は幅一間で抹香橋と名付けた、由来はその橋際に住む名主利右衛門が抹香を商っていたことから来ている。時代は明暦の頃という。

## 梅志翁を尋ねて

福井野迷路

先般前立腺手術後健康を恢復されていたが又手足が御不自由とのこと、今日は医者としてではなく柳友として御見舞いした。私が予期した悪い症状は悉無、全身から出る謡曲の声帯に些かのおとろえもないことを知り安神した。

梅志さんの路郎師を慕う話が次々と出た。師の所謂人生の陶冶の重心は句より心にあつたとの結論をきき改めて川柳に対する姿勢と云うものを考えさせられた。

達筆の短冊

古柳気骨ばかりが身をささえ  
を頂戴した

(梅志)

いたわりついたわられつつ喜寿の春

(野迷路)

の駄句をのこして辞去す。

川柳日記

四月の句

麻生葎乃

長生きの酒量減っても飲む話

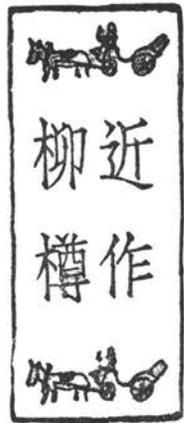
愛着を猪口へ残して老けてゆく

野犬狩目こぼしもある路地の犬

レントゲンへ立つ根性のあさましさ

夕桜暮ぎれのない土堤続く





菊沢小松園選

姫路市 前田 芙巳代

恋終ろうとする花よあちらむけ

大阪の余裕ホームへ鳩が降り  
菜の花の中で定年後の話し

風紋あざやかに抵抗とは知らず

出雲市 王

不倫の傷あとに塗るルージュが濃い

才女或る日愚かな母となる涙

愛告げて翼もがれた鳥となる

狂えたと聞く風強き日が続き

夢をいれたはずの小箱合鍵がない

ホステスの本気は妻の座を狙い

死語の真にプロポーズの言葉がある

結ばれて夢と現実入れ代わり

今治市 古野 伶人

広島県 岩谷 二三枝

父の靴もついでに磨く初出社

引き金をためろう真実の指である

初出社飼われて生きる背広着る

たぐりよせてみれば結び目なきえにし

ランドセルママは着物が出来ました

妥協せぬ心の鍵が掌に光る

銭湯でマーク隠しのサロンパス

追い風に足掬われるほど焦り

花の山他人の余興見てまわり

島根県 堀江 正朗

竹原市 三宅 不朽

輪の外のひとり天才かも知れず

手で賞でて賞でて桜の中に佇ち  
そわそわと落ちつかぬはず花が咲き

神様に仕えるのにも金が要り

長男にいつでももらった酒の味

満開にくちづけ僕の花見かな

島根県 堀江芳子

米子市 八木千代

点字音夫の生命の音として

花のトンネル豪華な散歩だと思ふ

天窓へ月は絵のよう来てすわり

風呂の炎よ涙をみんな燃してくれ

宿毛市 瀬田美知

鳥取市 両川洋々

いつからか孤独が云わず独り言

代筆へ心のだけは頼まれず

淋しさはだんだん女に遠くなり

湯をはじく肌の白さをいとおしむ

和歌山市 増田めぐみ

大阪市 小谷葉子

凍てる地に春うたがわずのぞく草

還らざるあの日の月もおぼろ月

つまれても吹かれてもなお桜草

ふと聞ゆ軍歌しみじみ身にしみる

神戸市 来住タカ子

岐阜市 市川鱗魚

悔ぬぐう布を夫がはなさない

劣等感言葉の刺を抜いている

ひと言に崩れゆく道雲を恋う

耐えぬいた涙が掌よりほどばしる

シクラメン少女の恋はこんないろ

米子市 林瑞枝

トルコ風呂君子あやうき所なり

見栄張ってみたが家計簿承知せず

娘が一人ふえた気嫁の土産買う

星の位置憶えて山の子が育ち

許されぬ恋しんみりと舟に揺れ

東大阪市 宮 西 弥 生

縛られて愛の深さを甘く受け

滝壺を覗く信者ぬれたまま

故郷に背を向け孤独の底にいる

島根県 小 砂 白 汀

たわむれる蝶が勝手な恋を抱き

膝まくら命あずけたころよさ

雪どけの川に素朴がよみがえり

大田市 藤 田 軒 太 楼

間引かれる運命知らず芽は伸びる

セールスは団地の見栄を狙って来

潮時と心得年功座を外し

東大阪市 坂 東 若 芽

散歩道袂を春の風が抜け

ひそやかにすみれになりたい日の感傷

入学へモデルのように母並び

大阪市 黒 田 真 砂

空しさは風のみが知るすれ違い

大阪市 和 田 痴 亭

園児にもボスありブランコ占有し

ロレックスやっぱり文字のないウォッチ

紀三井寺花の浄土の陽を仰ぐ

仙台市 平 野 光 道

つり革へ花見くずれがぶら下がり

うなだれて聞いて悄然と医局出る

声かけてそれから娘の部屋のぞく

竹原市 時 広 一 路

傷つけぬ言葉いろいろ考える

手に持ったグラスへ僕を問うてみる

花の咲く山いたずらな風も吹く

小松市 四方 天 弘 美

財産は無いが信用ゆずり受け

師の恩にそむいて冷たい答辞読む

巣立つ児は親の膝元煙むたがり

尼崎市 中 溪 慶 彦

泣き言を並べて豪華な荷を持たせ

倒産をさせたと知らぬ温い冬

聞いてないくせに解った振りをする

八幡浜市 別宮 すすき

まっすぐな枝をお流儀カーブさせ

ひとつかみの塩派手にまいて掛け

火遊びの髪流行に結びあげる

愛媛県 澄本 満子

生むことに決めて勤めの靴をぬぎ

臨終の手は握れないかげの愛

埋れ火の愛かきませて又も去り

奈良市 桑原 千里

入学の余勢つんどく本も買い

話し下手聞き下手道を迷い込み

後釜は何日までさん付けしてくれる

羽曳野市 麻野 幽玄

手を触れて見れば石にもある温み

道問えば期待どりの京訛り

冬堪えて来たのに潔きよい桜花

今治市 原田 輝親

花まつり南も北も仏の子

淳朴は寿永以来の山住い

石に矢が立ったを子供承知せず

羽曳野市 飯田 一治

石投げて学生歴史を変えてゆく

夫婦げんか女の爪は武器となり

道中を広げば不幸な人も出る

泉大津市 米原 靖子

恋の余韻みどりの月の暈も更け

こだわりを捨てきれぬ夜 石を蹴る

さようなら冷めたい花びら頬かすむ

松江市 大峠 可動

黄水仙土の匂いも抱いて咲き

空想がとぎれて冷えて来たベッド

夢の中故郷の道を歩いてた

大阪市 河原林 比呂路

教育ママ蔦を鷹にするつもり

解約に来たとも知らず自動ドア

酔い覚めの水をしぶしぶ妻がくみ

大阪市 田中 多幸

恋かたき目に物見せる自家用車

キリストに嫁つがせアーメン口に出ず

特急もおりて歩かす春の雪

尼崎市 中谷 利美

産めるだけ産んだ女房に先立たれ

おもしろいとこを帳場へ聞きにやり

頼りない気がする医者 of 低い腰

鳥取県 鈴木 村 飄子

入院とかかわりもなく春になり

看護婦に妻のしぐさを見つけたり

ベッドから今の政治がどうのこの

大阪市 堀 口 欣 一

今もなお逢坂山に検問所

どう見てもストリップパーとは見えぬ顔

標札屋ここにも長谷川一夫いる

出雲市 竹 内 李 朋

マゾの血が脈うつ夜の週刊紙

言い勝って帰る歩幅が定らず

病棟を筒抜けにして目刺焼く

島根県 石 倉 晃

胸あけて話せばもとの友となり

スピードをおとし満開花の下

雨を知る月で夜桜見納める

大阪市 奥 川 継之助

男対女傾斜のある話し

愛とは別な妻の真心

和歌山市 増 田 次 章

あげそうな腰を先客またおろし

送別の名残りは親の方にだけ

大阪市 江 城 功 雄

惜別の命を抱いた蒼い海

落花盛ん激しき恋の終りかも

東大阪市 落 合 思 月

蒸発も出来ずさりとて死にもせず

示談書へ実印笑って手をにぎり

大阪市 藤 田 頂留子

地下街の思わぬところに出てあわて

犯罪と捜査つづくかぎりの知恵くらべ

新潟県 高 野 不 二

流感も人よりおくれてからかかり

大学をこき下してるコップ酒

下関市 志 賀 汀 花

集団就職子を出した夜の風の音

合格を喜ぶ恩師の手のぬくみ

今治市 渡 辺 南 奉

投函の後で弱気な僕と知る

ウインドーの春を見て来た妻無口

八尾市 香 川 醉 々

土産だけは女黙って貰ったとき

背番号だけがプロ級草野球

羽曳野市 榎 本 吐 来

超ミニに向う座席でかしまり

喰い下がる道理で気負い立つ若さ

大阪市 影 山 啓 吉

おっとりと忘れたくなる春がすみ

口先はきれいな話してわかれとき

諫早市 原 田 明 春

足音へ指切りしてた手がはなれ

入試発表寄附高順にならべとき

堺市 藤 谷 象 園

釣銭に間違のない販売器

誕生仏自信あふれた立ち姿

七尾市 松 高 秀 峰

花見の座順が来そうな席を逃げ

初耳と云う事にして聞き上手

長野県 中 尾 愛

春宵は目覚めるままに惜しまれて

病床に陽春眩し沈丁花

出雲市 安 井 寿 年

節分の豆を掃除機吸い歩き

ビルが建ち家が建ち腹が立ち

平田市 川 谷 政 夫

病院が又も迎えた誕生日

口止めに買った煙草が無駄になり

出雲市 飯 塚 全 喜 知

あの人と思う事あり自尊心

どうしても忘れられない顔浮ぶ

八代市 船 木 史 朗

その気にさえなればダイヤも手が届き

実直な朝を吊革運んで来

大洲市 堀 内 暁 風

試験場出て背伸びする陽のうらら

薄情な男墮せとそっけなし

羽咋市 三 宅 ろ 亭

要らぬ米今年も田植するつもり

締めるつもり鶏が人になれ始め

大阪市 西 本 保 夫

ハイミスに伺い立てて窓を閉め

平社員と見抜いて名刺置いて行き

和歌山市 吉野富子

ワインクに鈍感何かと聞きに来る

隙あらばと構えの爪を赤く塗る

河内長野市 小川耕人

親の目に化粧上手が気にかかり

家原寺にて

さい銭も出さず落書して帰り

河内長野市 井上喜醉

ポケットのマッチへ妻の冷めたい目

どこ見てもあくびの多い終電車

竹原市 生信笑子

逆光へ女は影を抱いたまま

忘れよう忘れよう私に過ぎた人

鳥取県 大山果風

過疎地帯バス運転の減る噂

うまい米つくれと但し値は上げず

島根県 志賀美栄

野はうらら花と私とかげろうと

たわむれの恋にも似たり花吹雪

鳥取市 稲村光枝

落椿幼馴染の友浮ぶ

石段で一息つけば遠桜

和歌山県 林孝風

雨やんで貸し傘荷物になつてくる

どん尻と知りつつゆうゆう走り抜き

堺市 藤井一二三

汚職議員政治家らしい面構え

家計簿の勘定やっぱり合っており

和歌山市 飯家和美

子が留守になれば人形にもどつてる

風の中たんばはしかと陽をとらえ

藤井寺市 古結百水

集金へエエ口実の風邪をひき

何服んでみたかて六十若うならず

堺市 斎藤亜也

不精もの妾宅に来て庭を掃き

ゴム長じゃ鉢巻きほどの威勢なく

島根県 中島英子

花便り花を見にくる人をまつ

まようてる恋のレターに誤字あて字

諫早市 早田キヨ子

君遠し電話で好きと言った切り

しおりして客の切れ目を読みつなぎ

岡山県 武元柳子

よさこいの人形もある雛まつり

何もかも話すつもりで来れば留守

泉佐野市 大工チヨ

忘却があるから今日の幸がある

孫が来て壁にふすまにあいうえお

神戸市 横山孜孝

左利き下戸の幹事が物足らず

昭和の子煙の出ない汽車を書き

島根県 榎みどり

相談欄やはり女は弱いもの

初節句ほろよいの目におぼろ月

島根県 山本文子

病んで見て患者の気持が良くわかり

太陽がほしくて菜の花窓へ伸び

和歌山県 ふきあげ 虎城

ライターと指と遊んでいる対話

エライ目に会った浮気をもう忘れ

鳥取市 福山貴恵

母の膝懐かしがって耳掃除

颯爽と歩いて見たい神経痛

兵庫県 不二本和久

命まで呉れとは言わぬサンガラス

逢い引をしたと言わず茶漬け食う

岡山県 片山雅子

気の晴れぬままにさくらも散りかかり

大根と菜の花並んで花をつけ

守口市 岸本豊平次

励ましの言葉だけ誰もかけてくれ

大阪市 島野大吉

真直ぐに帰る夫は鳩を飼う

八尾市 高杉千歩

合格通知予備校であれ嬉しい日

高知県 山川勝子

葉桜になってもぼんぼりだけ灯り

鳥取市 近藤秋星

むかし恋せし人はだるまのように肥え

大阪市 加納楽々

飼えぬ身へ迷い仔犬がお手を出し

河内長野市 森本黒天子

老夫婦せがれのカメラに堅うなり

大阪市 岡本 まさひろ  
銀婚式茶のみ友達と名が交り

鳥取県 無閑  
春雨に詩情もわかぬくらし向き

尼崎市 井露芳  
電化生活最後は電化の火で焼かれ

和歌山市 田中政夫  
退職金末っ子までが計算し

堺市 細川 晁年  
古き時代の人が持つてるエネルギー

泉佐野市 大工 静子  
賽銭も子供は半額で頼み

大阪市 有信 新之助  
素子という言葉も識らねばならぬ日々

愛媛県 西田 父二夫  
馬鹿だとは言わず貴男はいいお人

鳥取県 有田 鹿の子  
寂しい日ぼつんと散った八重椿

和歌山県 加納 花秀  
ことわれぬ人と保険屋来て座り

京都市 丹羽 英二

数だけの豆喰べきれぬとしとなり

岡山県 谷森 和風  
遅刻して帰る時間はよく守り

倉敷市 小野 克枝  
名無草石の下から花になる

堺市 伏見 茂美  
結ばれる夢見ただけの恋の果

大阪市 梅園 摩耶  
乱房知らぬ子に冷めたい補乳瓶

竹原市 森井 菁居  
酔えば足る悔いは巻に捨てて無事

玉島市 河村 筒子  
一本と約束をして栓を抜く

笠岡市 高木 洪柿  
見学に来て献血をするはめとなり

仙台市 川村 映輝  
忘れてた元の肩書冗にくる

羽曳野市 前川 桂馬  
申告書税吏に同情される額

岡山県 浜口 志賀夫  
怪我人が出てから廊下に灯が点り

鳥取県 藤 泰 嗣

米寿まであと三年の誕生日

素晴らしいカメラほんとの歳に撮れ

鳥取市 藤 本 和 宏

大阪市 今 井 隼 人

物足りぬ絵の空雲を添えておく

鳥取市 藤 本 鎮 也

誕生日忘れるような年となり  
大阪市 田 沼 一 登

遅う来てあっさりカップ持って去に

鳥取市 藤 本 恵 子

女房の持参の人形年とらず  
大阪市 大 池 聖 川

松葉蟹ばかりのような魚市場

鳥取市 藤 本 恵 子

物干しの植木に積る春の雪  
大阪市 木 村 濁 水

もう嫁ぐ娘がメモする家庭欄

米子市 源 氏 勝 久

受験生あべこべに母をたしなめる  
大阪市 木 村 久 子

花の位置変えさすだけに秘書を呼び

京都市 藤 本 征 山

年取って昔の友のおさな顔  
大阪市 松 岡 進

又しても生命保険のビルが建ち

鳥取市 夏 目 葉 舟

逢う人があるのに料理まで出され  
大阪市 大 池 芳

記録したノートが誤解とり除き

鳥取市 藤 本 佳 女

妻だけが頼りと思う年となり  
大阪市 花 田 繁 子

噂ほど異性交際ない男

高槻市 山 田 スミ子

一も二も栄養料理味気なし  
出雲市 土 江 久 美

ヘルメット父いかめしい顔になり

大阪市 鈴 木 生 仏

スプーンに映った顔に迷いあり

# 川柳徳川記(五)

## 家康

(四)

### 富士野鞍馬

る。これを「冬の陣」という。

#### 夏の陣

冬の陣の和睦条件の中に「大阪城の惣堀を埋める」という一項があった。惣堀というのは外堀のことで、内堀はふくまないものであるのに、家康は、内外全部の堀を埋めてしまった。浅からぬ御思慮で堀を埋めたまひ(一〇六三)

それを怒った大阪方は、またも兵をあげた。それで、慶長二十年(一六一五)五月、家康は、再び軍を大阪に進めた。これが「夏の陣」である。

道明寺ひやひやとする夏御陣(二三三) 家康は、追いつめられて、ついに枚方で、干鯛舟の底へ、大久保彦左衛門と二人でかくれ、危難を免れたといわれ、

主従も伏見で舟の一夜ずし(二二二) 干鯛舟そこのとは気がつかず(九九七)

地にもまた日蝕のある干鯛舟(九七三) 一福をのせて干鯛のたから舟(二五〇)

御運いみじく船底を出御也(九六三) 長き世の御運干鯛の宝舟(九四四)

そこは凡夫のかぎつけぬ干鯛舟(一一八) 御高連國家をこやす干鯛舟(二六七)

天の加護漢の井戸和の干鯛舟(二六二) と川柳に作られている。井戸は、玄徳の子を

抱いて井の中に隠れた趙雲である。

#### 冬の陣

慶長十九年(一六一四)豊臣秀頼は、京都方広寺大仏の修復をして、梵鐘を鑄造したがその鐘の銘文中に「国家安康」という句があり、それは家康を調伏するのであるといつて家康は、外にも難題を持ちかけて、秀頼を圧迫した。

鐘の銘切れが有るのでやかまし(六二二)

何んぞあつたらの所へ鐘の銘(コリ三三) 京の鐘つかぬ先から大へこみ(三六四)

撞かねどこの鐘関東へは響き(一〇二七) そこがかね聲男でも仲違ひ(二四四二)

と川柳もそれを詠み、この難問題解決のため大阪方の知将片桐且元が、駿府の家康を訪ね奔疏につとめ、三ヶ条の要求をうけて帰阪した。ところが、そのうちの一条、秀頼の母淀君を人質として江戸住居とするということに

淀君は絶対反対して、且つ怒った。それをまた、

淀を為替と御工夫の一ヶ条(二四三)

片桐もこまるは質とかねのこと(七五九) 市之正二の足をふむ三ヶ条(七四七)

三ヶ条淀は濁ったお受也(六八〇) と詠んでいる。

ついに東西手切れとなり、慶長十九年(一六一四)十一月、徳川の大軍は、大阪城を攻めた。家康は、茶臼山に本陣を置いたが、大阪方が折れて、和睦となった。

茶臼山敵を粉にする御備へ(五三六) 御勝利は敵を粉にした茶臼山(五九〇)

みな引けと下知をし給ふ茶臼山(八一四) むつかしい判取のくる茶臼山(二九五)

その和睦誓文を受取りに、大阪方の木村重成が、茶臼山へ乗込み、家康血判のことなど

堂々と応対した話は、後世まで伝えられてい

る。

後に、この干鯛舟の船頭に、褒美として、  
枚方のクラワン舟の特許を与えたといわれ  
ている。

真田幸村も阿倍野で戦死し、ついに大阪城  
は火焔に包まれ、淀君も、秀頼も自殺して、  
豊臣氏は亡びたのである。

幸村も消えてなくなる夏御陣 (四六三)

幸村のかこみも解る夏御陣 (二二九)

御勝利は芦の枯葉を刈る如し (一一三)

御勝利はふくへのつるを切りたをし (安五宮一)

夏負も冬負もせず御凱陣 (明三)

と川柳もそれを詠んでいる。

## 東照大権現

慶長二十年(一六一五)は、七月十三日に  
「元和」と改元され、家康によって天下は統  
一された。

永き代を猿骨折って寅がとり (二〇〇五)

申は暮れ寅は日の出の御威勢 (二四四三)

猿の尾は短かし虎の尾は長し (七八二)

桐かれて松の茂れる御威勢 (八五二)

一猿・桐は奇吉、寅・松は家康一

時津風元和このかた吹はじめ (九四二)

鎧武者出たは元和の五月きり (二〇二四)

元和以後天下は廻り持ちでなし (二二六)

元和このかた吹き通す時津風 (二二四)

御開運関八州に八をかけ (二四四)

と、川柳もその後の泰平を謳歌している。  
「御家記」に

「家康公、元和二丙辰歳正月二十一日、為  
御鷹野、駿州田中へ被為成、二十二日の夜  
御痰指出御不例、同二十五日駿府へ還御。  
様々御養生、良医衆数多被召加御養生とい  
えども、追日御驗氣なし。同年三月二十七  
日、被任太政大臣。黄金千枚献上、并に両  
人伝奏金五十枚宛、大相国家康公より被  
遣。従秀忠公、長光の御太刀、白銀千枚、  
毛御馬被遣。御不例知月三日より被為得御  
驗氣、同十二日より御再発、十七日巳刻御  
逝去、春秋七十五歳」

とあるように、家康は、元和二年(一六一

六)三月には、太政大臣に累進し、四月十七

日午前七時、七十五歳でなくなったのであ

る。その七月には「東照大権現」の神号を賜

わり、元和三年一月には、正一位を贈られ

た。廟所の久能山に東照宮が建立されて祀ら

れたのである。

御神事は国治まって一つふえ (明四智一)

以後御見知りと元和二の大社 (二五八)

一 出雲大社へ十一月神々集る一

その後、孫の家光が、日光山に改葬して、

莊嚴な日光東照宮ができた。

山号は光り照すは御神号 (四八・八二)

日の光る君は源氏の目貫也 (五九)

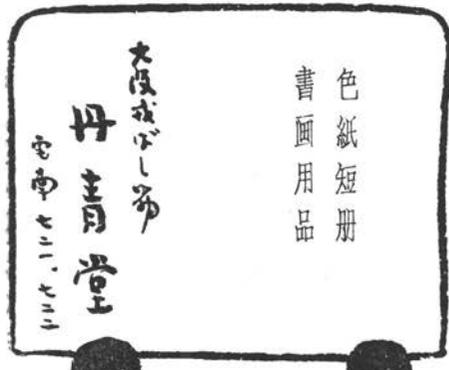
と詠まれている。

★

富士野鞍馬氏の新住居は、東京都港区白金  
台五丁目十三番十五号(郵便番号1008)

清水一保氏(鳥取同人)は議会代表として  
文教行政視察で四国へ旅をされた。琴平から  
一参道へ石松も座し袖を引き (一保)

東野大八氏(美濃加茂市)は五月某日、バ  
イで飲まれた翌日、社で気分が急に悪くなり  
医師と看護婦をよぶ騒ぎだった由。このこと  
を聞いた後藤梅志氏が加茂鶴を送って見舞わ  
れるなどの美談があった。



# 薫風氏にお答え

## 本田 溪花坊

長女二女三女どうなり嫁入らせ 溪花坊

軸

お互に娘をもって家の客

娘から娘へ送る状袋

うつむいてからが娘の姿なり

注目すべきは、集句から二句抜いて、軸吟を

三句出していることです。

なお日車のことについて御参考までに。

日車旧蔵の「葉柳」全十七冊合本が私の文庫

に現在愛蔵しています。葉柳誌は、小島六厘

坊、川上日車（その時は七厘坊と号す）明治

三十九年六月第二巻第一号出る。十七冊は、

明治四十二年四月十日号（終刊号）まで、

大阪柳壇を知る貴重な資料で現在「葉柳誌」

を保存しているお方は聞きません。

葉柳の出た前年、明治三十八年五月二十五

日に六厘坊は「新編柳樽」誌を三冊出して、

これを第一巻とし、葉柳第二巻とあるのは、

新編柳樽の第一巻を踏襲したものです。

川柳堵五月号P25の薫風氏稿に、川上日車の奇行記あり「日車さんは何処かの句会で選をされたとき、たった三句抜いただけで、あとは全部没にされたとか」の稿をみて思い出しました。

あの句会私の出した「大大阪」創立句会のとときで、もう昔となります。「大大阪」創刊号（大正十三年三月一日発行）P46に創立句会の記事掲載、句会は同年一月十二日、南区長堀橋大紙倶楽部で参会者五十六名

当日互選「注連の内」水府選「男衆」路郎選

「掛掛屋」日車選「娘」溪花坊選「大福帳」

薫風氏の書かれた日車選句は「娘」の句で

橋高薫風氏は三句抜句とありましたが当日五

十六名出席の「娘」の選句は二句しか抜いて

いません。日車選の集句は百二十五句の内と

記されて居り、抜けた句の二句を御参考のため

に。

混雑をぬける娘に力あり

水府

### 川柳塔社常任理事会

本社理事會が五月二日午後六時から開かれた。連休を前にしているだけに、出席率がまず心配だったが、フタを開けてみると常連のほとんどの顔がそろった。

経営面に議題がしぼられ、あれやこれやの名論があび出す。しかし同人誌には宿命的なものがない。ただ同人が力を合わせるだけが発展の道である。

出席：白柳・好郎・柳宏子・生々庵・形水・栗・小松園・文秋・一三夫諸氏。



磨かれた伝統の味

司子菓子

鶴屋八幡

本店・大阪市東区今橋5・電話(203)7281  
 東京店・東京都千代田区麹町2・電話(261)3996  
 売店・各百貨店のれん街

# 近 詠

大阪市 橋本 緑 雨

棕栢竹だけしげる庭を持ち

友情は寒さなんぞあるもんか

高鷲亜鈍氏の長女結婚

おちついてくれたよろこび父元気なり

人眠れば我れもねむる汗をかき

花咲けど我れは生花同然なり

須坂市 高峰 柳 児

子供にも虚勢の重荷団地の眼

庭下駄が春の動きへそろえられ

今産んだ玉子を民宿膳にのせ

人間国宝生き抜くそろばんわきまえる

大洲市 米 沢 暁 明

伸びるだけ伸んでゴム紐捨てられる

伝票を廻してうまい煙草の輪

仕合わせはため息をつくひまがあり

今治市 月 原 宵 明

予備校にいてふるさとの花を恋い

さくら咲くこころで春斗妥結する  
夜桜へ悟った顔の無一物  
われもまた凡夫桜の下で酔い

和歌山市 秋月 宏 方

高いびきこの人苦勞ないような

山陰に旅して

波の音聞いて寝る夜もまた楽し

伝説は伝説として聞いておき

名古屋市 長谷川 鮮 山

本当の事が知りたくおごる酒

抽籤で席へ座らすそれもよし

面接の膝へきちんと置く両手

今治市 長野 文 庫

定年が愛想笑いの尻尾振る

手を抜いた上をごま化すベニヤ板

泥はねて行くタクシーのかせぎ時

小松市 山上 千 太 郎

心一つからだ一つがまとまらず

芽がほぐれ出して山彦目をさまし

あすもあることにして無理をせぬ余生

テ ー プ

竹内圭三選

ガラス屋が来るまでテープでもたせ  
 一年生待つ教室のテープゆれ  
 父だけがテープの渦で傘を振り  
 テープした家族の声を子に送り  
 このテープ解いてみたり廻したし  
 小使の孫がテープを先に切り  
 のびるだけのテープは海へ切れ  
 テープこまもうさよならの声が  
 完走のびりをねぎらうテープ張る  
 切なとなったテープヘドラが鳴る  
 くだびれた紙幣を裏打ちもテープ  
 初舞台サクラも交りテープ投げ  
 花嫁の方が沢山持つテープ  
 録音のテープに父が生きており  
 嫁入りをよ気テープをそつと割ぐ  
 テープぶつり切り始まメロドラマ  
 虚しさはテープたぐられ丸められ  
 無器用な指にからんだセロテープ  
 投げテープ黄い声で飛んで来る  
 大過なく過ぎ停年のテープ切る  
 切れて飛ぶテープに別離たしかも

貴枝 軒太楼 新之助 清夢 百水 公輔 代仕男 幽谷 利美 双案 輝親 誓二 孜孝 星風 白汀 宵明 綾女 秋月 凡九郎

遣言のテープ意外なことを云い  
 生れ変わるつもりテープもなく船出  
 テープ切れてからは自由な味気も  
 テープのびて言い忘れた事があり  
 出港へお見知りねがうテープ伸び  
 悪びれずどん尻白いテープ切り  
 ハネムーンテープが切れて二人も  
 日帰り旅じやムードも出ぬテープ  
 一本のテープに託す愛の歌  
 本物が来て開通のテープ切り  
 観光も密輸もせてテープ切り  
 肝心なところをテープは聞き逃し  
 温室を捨てる移住のテープ切れ  
 ぬけぬけとテープにも嘘を云う  
 よそゆきの声でテープにかしこ  
 一生の不覚テープにとられてた  
 見習いと知ってくっセロテープ  
 音痴さをテープにしかと教えられ  
 大臣が切ったテープの路で事故  
 渡り初め汚職の主が切るテープ  
 ゴムよりもテープが好きな胸廻り

住

無聖 勝久 和久 不二 礎山 素身郎 扇水 七面山 洋々 一治 史朗 政夫 芳子 葵水 与根一 弘朗 春日 初甫

テープ切りがき着てきたモーショング  
 篝火の音もテープに花便り  
 出航のテープは思い切れと云う  
 あかぎれをテープで巻き出る稼ぎ  
 義理で来た顔もまじってもテープ

幽谷 いわを 肖二 清夢 不二

こんな声やないがとテープ巻きとし  
 口にテープ貼ってやりな妻の愚痴  
 優勝のテープバスタの差で切られ 鶉汀

古方 一二三

貸し傘

岸南柳選

貸す方が遠慮して出す破れ傘 扇水  
 丹前の群貸し傘でお湯の町 清夢  
 春雨へ又来て欲しい傘を貸し どんたく  
 下心あって女将の貸した傘 弘朗  
 貸し傘の外人に逢う京の雨 宵明  
 晴れた朝貸し傘提げて出る律義 肖二  
 商魂がひそんだ貸し傘貸してくれ 邪子  
 貸し傘へ団体頭だけを入れ 与根一  
 貸し傘のごときが人間評価させ 凡九郎  
 貸し傘へ世は道連れの雨の音 千翁  
 貸し傘を返して来た酔うて去に 洋々  
 貸し傘が恋の端緒のつなぎ糸 無聖  
 貸し傘が一本二人に嬉れしい日 礎山  
 下校時の貸し傘足りない俄雨 恵子  
 貸し傘が取り持つ縁で四十年 貴恵



# 初歩教室

題 「誘」

## 本田 恵二朗

目を閉じて愛の鼓動を信じあい  
鳴き竜へこんどは妻が手を叩き  
チューリップがそと吸い取る鐘の音

李朋

チューリップの句の繊細な感覚をあなたのものにするべく励んで欲しい。大体好調だ。合格の音たてて靴脱ぎ捨てる

桂馬

上首尾の靴音夫の音である  
表現をあれこれと考え抜くことの楽しさこそ  
短文芸のだいご味である。

誓二

快心の一石盤上火花散る  
一連の句快音あり、さあ前進、前進。

光枝

子の寝顔覗く足音殺さねば  
説明調を脱する努力、それが貴女の進歩だ。

瑞枝

郵便受コトリお針の手を止める  
身辺から句材を見つけたたり、拾ったりして、  
生れてくる句は、貴女の可愛い子だ。きれいなオベベを着せてやろうよ。

扉ドンと腹いせらしい音で閉め

春眠へ目覚しの音無情なり  
川柳入門の足取り、春風に乗って、いとも軽  
ろやかと見受けた。折角のご精進を祈る。

儀一

それぞれの思いで雨の音を聞き  
トクトクトク憎いばかりのCM  
テレビのCMに喉を鳴らさされてる顔が浮ん  
でくる。川柳街道本日も晴天だ。

史朗

出稼ぎの無い音沙汰を信じあい  
作句への熱意と努力こそ、前進への原動力だ  
あなたはそれを実行しつつある。

東雲楼

牛乳壘ガチャガチャガチャと朝にする

弘美

団地の朝の風景をまんまと活写したよ。  
足音で不首尾と知った妻の勤  
五句揃って、一応頂ける。ご精進あれ。

慶彦

音ばかり日曜大工はかどらず  
わが城が建つ槌音のリズミカル  
小さくても正しくわが城である。大げさに喜  
んでみせたって、文句言う奴はいないよ。

和風

騒音の中で上司へ怒声めき  
座五の「怒声めき」で句が完全に生かされた  
よ。この調子で快進撃をしようではないか。  
寝つかれぬしじまへ秒の音湧える  
眠れぬ夜の焦りを、こんな風に描写できるの  
も、川柳人ならこそである。

秋月

通いなれし道足音も影も疲れ  
この程度の字余りは許される。句主の境地は  
足音も影も捨てたくないのだ。それでよし。

孜孝

山寺の空までにごす街の音  
閑静を身上とした、寺のムードのこわされ勝  
ちな昨今を嘆くのは、句主ばかりではない。

虎城

雪解水小川を春の音にする  
春の音に耳を傾ける句主の心、それは詩情で  
あり、待望の春への心の躍動である。

英詩

石を蹴る音鍵っ子へうつるなる  
あんなに美しい夕映えなのに、鍵っ子の心は  
さびしかりと温い愛情がにじみ出た。

一二三

矢のような快音スタンドに突き刺り

肖二

オーバーとも見える表現も、川柳の面白さ。  
ゼット機の無情な音へ散り急ぐ  
ゼット機の音は、動植物の生理をこわす音。  
当然の帰結のおなか音がする  
いとおごそかな診断振りに、微笑笑した。

静観堂

さよならも言わずストンと夕陽落ち  
擬人と擬音との組合せの面白さよ。

美代

騒音の中で育って来た神経

保夫

騒音が神経質に育てた場合と神経太く育てた場合があるう、この句は後者の方だ。

足音へさつと二つに割れた影

政夫

川柳への意慾がもえ上ったらしいぞ。

ノックコツコツ新社員しやちこ張り

富子

新入社の気の使い振りは涙ぐましいものだ。

隣りから兎こちらへ追うた音

大吉

現れたら、いち早く、追い返えず魂胆らしいが鼠公とんと現れない。鼠につままれたよ。

口口に十人十色の音を出し

啓吉

声ではない、音である。さてどんな音だろうかと想像をめぐらせていたら苦笑されたよ

グラス合せ顔顔春の顔である

正行

グラスを合せた音も春の響きである。

音もなく女の願い崩れゆく

茂美

この調子を忘れないで、ご精進あれ。斗病に終止符打たせた春の音

正にわが世の春である。うれしい音である。

真砂

待ち兼ねた入園可愛い音をたて

静子

可愛い音、それはうれしい音である。そして全く邪気のない音である。

かくし芸出る頃音痴席にいず

比呂路

音痴君今日は手品の種を忘れて来たらしい。音たてて反応どうかと試してみ

へんこつのすぐ雑音を入れたがり

音声を痛めましてが鐘三つ

軒太楼

快調だ。だが道は長く遠い。絶え間なき努力の成果を期待しよう。

移植の鼓動世界がじつと聞いている

新之助

快打一発・美事なヒットだよ。

今回は皆さんと、ゆったりとした気分で対話したつもりだ。私は沢山の柳友と、仲良く

手をつないで、長年川柳街道を歩き続けているが、それはあきることなき楽しさであり、生涯続くであろう楽しさでもある。ここ十年

来、私の川柳意欲の六割は、実社会の方へ向いている。それは川柳を作らない一般社会の人達に、川柳の良さを知ってもらったり、愛

好してもらいたいという念願がしからしめて

いるのだ。句碑建立も、句集発刊も、その意慾の一つである。川柳が単なる仲間文芸であ

ってはならないと私は思っている。対社会ということは、口で言うほど、安易なものでもないことも知っているが、或る点まで成果を挙げ得たと思っている。対社会となると、難解

句は落第である。そして句品が肝要である。平易な句の方が感動を呼ぶという事実を体験している。それは年齢も性別も問わないし

知識人達に難解と平易とを取りまぜて、鑑賞してもらった結果が、そう現われたのである。又十八才から二十三才までの独身女性達

で、高校卒以上の学歴の持ち主達に私の昭和

二十七年から三十年頃の句を鑑賞してもらったら、感動してくれたばかりか、作句を始めた人も現れた。この結果から思うに、革新必ずしも新しいと言ひ難く、本格必ずしも古いと言えないのではなからうか、こうなるとマイペースを続けるより外なさそうだ。

★

題「木」 六月二十日締切（八月号発表）

題「道」 七月二十日締切（九月号発表）

宛先（〒711）倉敷市下津井三五二

本田憲二郎

▼直原玉青氏指導の青玲社日本画展が六月三日から八日まで、阪急百貨店七階催し場で開催。生々庵、小石夫妻も出品。

黄銅六角ボールトナット

及び特殊換物全般

合資 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地

TEL (06) 三四五二一四

夜間 06 四四〇八

大 萬 川 柳

「湯 氣」

入選発表

選者 清水白柳  
投句総数 六百二十四句  
入選 五十三句

丸 亀 袖蘭坊

うまさうな湯氣を見ている雨宿り

高 石 好 郎

女文字氣になり湯氣で封を開け

大 阪 小松園

コーヒーの湯氣立つ距離へ別居

大 阪 弓 彦

すき焼を眼鏡拭き拭きかきまわし

岡 山 柳 子

湯氣の中一〇〇を数えた頃を恋う

高 根 芳 子

コーヒーの湯氣を見つけて思案

大 洲 暁 明

女湯のみんなきれいに見える湯氣

下 関 不 水

無駄な湯氣立てて銅壺は猫と待ち

広 島 英 詩

湯氣までも見えそう仁王の恐い顔

守 口 笑 風

素うどんの湯氣に情がわかりかけ

大 阪 あいさ

湯鬘斗したように湯上り若くなり

大 阪 水 客

お握りの湯氣しばらくは母の手に

堺 天 笑

土瓶むし湯氣も値段の内かいな

和 歌 山 葵 水

製品は知らぬが工場湯氣を吐き

米 子 瑞 枝

出雲そばホームで湯氣を吹くあ

大 阪 儀 一

妻の目がネオンの湯氣を敵視する

笠 岡 要 次

大胆な女体を湯氣にさえぎられ

岡 山 一 声

猫舌がまだまだ飲めぬ湯氣を吹き

富田 花 梢

美容師に顔をあげた蒸したオル

大 阪 比呂路

コーヒーの湯氣だけが知る恋の私

藤井寺 百 水

吸入の湯氣鼻先が搔ゆくなり

倉 敷 千 翁

おしぼりのもう税金に消える湯氣

大 阪 旅 風

女湯の湯氣は前向きうしろむき

岡 山 久米雄

素うどんもうどんも湯氣が立ち

吳 甦 光

再生の毛糸は湯氣を通り抜け

豊 岡 和 久

待ちぼうけ鉄瓶の湯氣ただ見つめ

鳥 取 和 宏

野天風呂湯氣も一枚撮っておき

鳥 取 鎮 也

銭湯の湯氣に解け合う声をかけ

倉 敷 素身郎

間歇温泉地球たしかに生きている

水炊きの湯氣あいさつがまだつ

西 宮 百 酒

かんぱんに湯氣を残して屋台去に

茶柱が倒れぬ湯氣のうちに飲み

羽曳野 桂 馬

湯氣の中だけの民謡まだ聞え

南大阪川柳会の会場が本社句

会同様アベノの以貴和荘に六

月句会からかわりました。

お目あての混浴湯氣が立ちすぎる

大 阪 文 秋

内風呂の湯氣に団地の部屋湿り

湯氣のま封じてジャーは掃宅待ち

大 阪 阿 茶

静かなる湯槽無心に湯氣を見る

御あかしへご仏飯湯氣お茶湯氣

湯氣だけがご馳走ですともてな

倉 敷 里 風

珍客ヘボットの湯氣をつきこぼし

混浴の湯氣で手形をふと思ひ

盛り飯の湯氣へ孤独をかみしめる

岡 山 秋 月

茶柱を立てたく湯氣を吹いてみる

女湯は湯氣立ちこめてよく見えず

立喰いの顔をかくしてくれた湯氣

佳 句

堺 一 舟

川に湯氣立てて公害と思つてず

大 阪 小 路

残り茶の湯氣日だまりの土工屋

大 阪 慶 之助

お説教が終れば湯気のぬめうどん

大阪柳志

汚職など知らずうどんの湯気を吹

き 米子千代

もどかしい恋ラーメンの湯気を吹く

人ノ句

大阪新之助

炊出しの湯気を世帯の手が捌き

地の句

岐阜鱈魚

煮物好き母に何やら湯気が立ち

天ノ句

倉敷克枝

湯気の音だけは知ってる黙香権

選者吟

露天風呂湯滝を勿体なしと見る

大萬川柳四十四年度第五回

ベストテン (五月現在)

一 文秋 一、〇 大阪

二 千代 一、〇 米子

三 小路 一〇、五六 阪

四 鱈魚 九、五 岐阜

五 柳志 九、五 大阪

六 克枝 九、〇 倉敷

七 瑞枝 九、〇 米子

八 水客 七、五 大阪

九 秋月

七、〇 岡山

十 天笑

七、〇 堺

十一 素身郎

六、五 倉敷

十二 美房

六、五 大阪

十三 里風

六、〇 倉敷

十四 花梢

六、〇 富田林

十五 阿茶

六、〇 大阪

十六 吸江

六、〇 藤井寺

十七 史好

五、五 大阪

十八 晓明

五、五 大洲

### 大萬川柳余聞

最近の大萬川柳の入選者に新しい人がドンドン進出してきたことは楽しい、しかし、その反面、ベテランよどうした? ということにもなりそうである。かつての大萬川柳で、新人が天位をとるようなことは、まめ皆無に近いほど、新人には狭き門だった。

かつては大萬川柳の天位の句には、発表ごとにうならされたものである。また

十九 青香

五、〇 堺

二十 弘生

五、〇 大阪

二十一 小松園

五、〇 大阪

二十二 好郎

五、〇 高石

二十三 多久志

四、五 西宮

二十四 慶之助

四、五 大阪

二十五 葵水

四、五 和歌山

二十六 笑風

四、五 守口

そのいう句は、ベテランでなければ作れなかったのだ

最近は大萬川柳でも新人の進出はめざましいものがある。ここでもベテランどうした? ということになりそうである。

雑詠とちがって課題吟には内容の深さとか、味というものをあまり要求されないから、新人に扉を開かれているように思う。  
故豆秋氏や好郎氏の作品には、よく路郎先生が膝を打たれたものだった。— F

昭和四十四年度第七回

「横顔」五句以内

締切 六月二十日

第八回

「午後」五句以内

締切 七月二十日

投句先

大阪府高石市高師浜三丁目五二

以下略

郵便番号五九二  
川村好郎

旅行・宴会・リクリエーションのことならどんなことでもご相談ください。

楽しい旅行のコンサルタント

## イチビシトラベルサービス

本社 東京都大田区蒲田 4-40-5

TEL 03 (733) 6951

守口出張所 守口市京阪本通 2-18

三洋電機株式会社食堂内

TEL 06 (991) 1181 内線 588

# ☆ 柳 界 展 望 ☆



右から松本蘇範・川岡雲眼子・清水白柳・江副牛亭・庄司万象・前山五龍諸氏

(橋高薫風担当)

▼第十二回近県川柳大会(竹原市)は九月七日(日)正午から竹原市民会館大ホールで開催、兼題は、傘・マツチ・海・盃・各題二句以内短気・海・血各題二句以内投句は竹原市竹原町田中山内静水方竹原川柳会近県大会係宛。

▼時の川柳百五十号記念誌上旬会は第一回は五月末日に締切られたが、第二回兼題は呼ぶ・過密・一人・扉面(六月末日締切)・第三回、左右・生涯・私

○良縁・演技(七月末日締切)各題三句、原稿紙半截各題別紙、会費は各回ごと七円切手七枚同封、封書に「誌上旬会係」と明記して神戸市兵庫区神田町四〇時の川柳社宛。

▼むらくも二十周年記念観桜旬会は四月六日木次町かね平で開催、正本水客・尼緑之助・弘津柳慶諸氏らの出席で極めて盛大であった

▼静岡川柳社創立四十五周年榎田竹林・柳葉女金婚記念祝賀川柳大会第一部(旬会の部)は九月二十八日(

日)午前十時から静岡駅前日興会館六階光琳閣大ホールで開催。兼題は、傘・余聞・金文字・城下町・不退転・表札・愛・結ぶ・糸・のりくらり、席題三題、会費千二百円。第二部(懇親会の部)は午前五時から同所鳳凰の間で、会費千五百円。

▼第三十六回奈良県川柳大会は五月十一日薬師寺養徳院で開催、岩本雀踊子・宮口笛生両氏が課題の選を担当された。

▼南大阪川柳会・玉造川柳会合同吟行は、スト明けの四月二十七日午前十時から京都府八幡町律寺で開催、清水谷句楽坊大僧正の心からのおもてなしと、ふんだんの筍料理に参会者三十余名はきれいな空気を満喫した。「氣のままに歩く律寺の春深し」智子、「柳友としての和尚は朗らかな」雀踊子

▼藤村青一著「白黒記」へ寄せられた諸家の感想文(書簡拔萃)が一小冊にまとめられ、出版記念旬会に代

えて三月一日大阪市東区南新町二の二四橋本言也方から発行された。西川晃氏(大阪市歌人)の言葉、「五年内句集を出された大兄の強靱な意志力と、冷めることのない情熱に驚嘆しています。小生よりも大兄の方が本当に生きていられるようです。」

▼鹿乃子発刊三百号記念会同句集の応募は、自選十句郵便番号、住所・氏名・雅号を明記、三百円封入の上六月末日までに宇和島市追手銀座鹿乃子発刊三百号記念事業実行委員会宛。

▼瓦版十周年記念旬会は五月六日(火)午後六時から読売新聞大阪本社で開催。は北本多久志氏(副理長)が若コペンハーゲンから歴史の遺跡の数多くを見物アンデルセン像や、人魚の像などに心なごまれた。「浮世からぬけ出たかなと夢の国」

▼清水白柳氏(大阪理事)は福岡市の令嬢訪問かたがた九州旅行へ。柳川で白柳

▼麻生霞乃先生は今年喜寿(お誕生日は二月)を迎えられたが最近胃の具合を悪くされて食事、外出などを控え養生しておられる。主催俳諧かほる吟社。

▼一九六八年度周魚賞受賞作品が発表された。第一席病む窓で見れば働く人ばかり札幌市―山田青船。第二席―なぐさめる時悴せを身に感じ―シャトル―米山美津子。第三席―目頭をふく友を見た端した金―東京都―小谷源氏

▼阿部佐保蘭追悼旬会は六月八日(日)午後一時から東京都高円寺駅前協和銀行で開催、兼題、左・保・蘭主催俳諧かほる吟社。

▼東京番傘川柳社創立三十二年記念大会は六月十五日(日)午前十一時から都立産業会館で開催、岸本吟一氏製作の映画「こんにちわイストラエル」が上映される。

▼第一回岩手県川柳大会は五月三日午前十時から宮古市会議場で開催。

という名の蒲鉾に驚き、四月十七日は阿蘇へ、玉温泉の野天風呂を楽しみ、次いで諫早熊本下関と巡り、大島瀾明、川岡靈眼子、中村九呂平諸氏の歓待を受けられた。

けておられるが、六月八日の春季謡会までには退院される予定とのこと。

▼本多柳志氏（大阪同人）は連休を利用して家族連れで北陸へ、スモッグのない空気を満喫されたが、カーラッシュには閉口された由。

「日本海の風大阪の汗が引き」柳志

▼河村日満氏（鳥取参事）

から「四月二十五日午前〇時四十分頃大音響に飛び起きたら、家の出格子がめちやめちや、小型の荷物車の酔っぱらい居眠り運転の被害を被ったことがようやく判明、家の被害の害に自動車に損傷がなく、事故とはこんなものかと語り合った次第で、当方怪我人なしが何よりでした」

▼後藤梅志氏（大阪参事）は五月七日、休養の意味もあって大手前病院二百十一号室入院、精密検査を受

▼浜田久米雄氏（岡山参事

## 新同人紹介

谷 無 閑

— 弘朗・日満推薦 —

の句碑は選歴記念に昭和四十五年秋頃に完成させる予定であるが、備前川柳社の創立二十五周年が四十六年春に来るので、双方の祝事を兼ねて、四十六年春に川柳大会を開催したいと考えておられる。

▼島田兼孝氏（大洲市）は年度末から初めにかけて公私多忙で、中学から専門学校にかけてマラソンの選手だったので、未だに走り続けておられるが、七十五才ともなれば他県の川柳大会に出掛けるのが大儀に思われるとのこと。

▼三井醇夢さん（香川同人）は昭和四十四年度香川県展書の部に出品された「静夜思」（李白）が見事入選、桃陵公園の夜桜も感慨一入である。

▼宮口笛生氏（奈良同人）

は四月四日から吹田の鉄道学園へ入学、動力車の授業を一日七時間受講、職場に帰ればすぐ教えなければならず齡とってからの勉強は死もの狂いだ。「四十の頭にしんどい近代化」

▼藤井春日氏（倉敷同人）は職場の倶楽部活動文芸部の川柳部門で二十名ほどの指導をされているが、熱心で頼母しい会員が増えて行くのを楽しみにしておられる。

▼川岡眼子氏（諫早同人）

前山五竜氏（諫早川柳会長）

江副牛亭氏、庄司万象氏は四月十七日夕諫早駅前

「とり伴」（嘗て路郎先生来訪の料亭）で清水白柳氏歓迎の宴を持たれた。

▼中村九呂平氏（下関同人）は四月二十日光明園で開催の一杯水例会に清水白柳氏を迎え「意義ある三時間余を楽しみ、十一人だけでは勿体ない良い柳話を頂戴した。」と書きされた。

▼柳楽鶴丸氏（松江同人）

は胃潰瘍再発手術のため、松江市母衣町日赤松江病院中三階外科病棟へ入院、速かなる快癒をお祈り致しております。

▼近藤秋星氏（鳥取市）は第九回鳥取市民作品コンクール川柳の部で第一席に入選。「せめてものせいたく

みかん箱で買い」選者は森田若人・河村日満・大西八歩三氏。

▼藤本礎山氏（鳥取同人）から、「川柳塔本社の皆様にご心配をかけて申訳ありません。現在六十、約三。体重も増え、疼痛のない時は散歩もしております。後略」

▼山田季彦氏（高槻同人）

五月三日京都伏見の長建寺宇治の万福寺、東寺、東大本願寺を巡拝。

▼西田柳宏子氏（大阪市同人）は四月二十九日中之島フェスティバルホールで開催の大阪国際フェスティバル参加邦楽部に参加出演、尺八「六段の調べ」。「明治松竹梅」を合奏され好評を得られた。

▼大江秋月氏（兵庫同人）

は第二回二大鉄芸芸に川柳随筆共に二等入賞「賞状の文句月並だが嬉し」一秋月。

▼小島無聖氏（兵庫同人）

右腕が神経痛で電気治療中とのこと。

# 本社 五月旬会

会場 以和貴荘

六日 午後六時

飛び石連休からはじまるゴールデンウィーク明けの六日が旬会という悪条件。だがフタをあけてみると、いつもより数名多いご出席だった。新しい方も何人か顔を見せてくださるしありがたいことである。毎々書くことだが、ここへもうすこし市内在住の方にご出席いただくと、いい線が出てくるのだが、とは欲が深すぎますかナ。

清水白柳氏の柳話は、四月に九州旅行をされたモロモロのことで、句碑や詩碑から店名の「白柳」という文字もとびだす愉快な三分旅行だった。

席題「大型」で天位をとった今西寿子さんは、二月旬会の初出席にも天位というパツグンさ。さすがに名伯楽川村好郎氏のモウレツさがうかがえた。

月間賞は西川誓二氏のためみない努力がここに実ったという感じである。

(F)

出席—古方・新之助・庸佑・武助・操子・

幸代・与呂志・瓢太・一舟・綾女・いさむ・一三夫・文秋・肖二・柳宏子・生々庵・凡九郎・水客・大吉・没食子・花梢・滋雀・痴亭・美房・双楽・儀一・幸子・トメ子・鶴声・形水・白柳・好郎・酔々・静歩・小松園・千梢・榮・頂留子・笑痴・弥生・静馬・天笑・金三・誓二・村雲・万的・葛城・季賛・寿子・喜風・弓彦・摩太郎・凡吉・虎声・河産・勝晴・つき子・義英・薰風・吸江・宣介・恒明・奈良子・鬼遊・葉子。

## 席題「大型」

福浦勝晴選

大型の名刺へ書いた紹介状 静歩  
 大型は此処までという山の宿 水客  
 金一封大きなわりにはいってず 静馬  
 一・八〇でまたお見合いがパーに 一三夫  
 徳用と言う大型の餌でつり 滋雀  
 大型の危機合併で切り抜ける 形水  
 大型の景気をドヤで聞く不遇 滋雀  
 大型化する空港が揉めつづけ 弓彦  
 縁のない大型株の値が上り 鬼遊  
 大型の景気に設備立ちおくれ 誓二  
 大型と言われ二軍でまだねばり 笑痴  
 大型を見ただけ買わず去に 好郎  
 大型の名刺傍若無人なり 酔々  
 大型のパスぬり替えて春を待ち 操子  
 大型で値上げしませんコマージュル 奈良子

大型のビルに勤めて部屋住まい 大吉  
 大型の名刺は出馬する下地 一舟  
 次考えて大型にする予算 季賛  
 大型とさわがれホープ重荷なり 恒明  
 L寸がだぶだぶになる病み上り 大吉  
 大型に乗せるうれしい荷を定め 与呂志  
 大型の台風ビクビクさせてそれ 恒明  
 嘘も大型成程議員にならば 万的  
 火事現場這入れぬ大型消防車 双楽  
 臣茂以後大型の出ぬ政界 一三夫  
 大型のテレビで座敷せまくなり 綾女  
 大型の妥協汚職のにおいする 万的  
 本番になって大型パットせず 金三  
 犯罪も大型となる億単位 村雲  
 大型トラック遠くからさけて待ち 寿子  
 大型の合併こまかい気を使い 勝晴

## 席題「消印」

木幡村雲選

消印を打つにもやっぱりあるリズム 庸佑  
 消印が証拠と駅から出す葉書 万の  
 消印が証拠とちめられてる 恒明  
 途中下車した消印と見破られる 恒明  
 消印が頼り家出の娘を探がす 鬼遊  
 消印有効やと締切り間に合わせ 奈良子  
 消印をあてにうろうろ保護願ひ 摩太郎  
 郵便番号早よ着いたと見る消印 没食子  
 消印が欲しくエハガキ後に着く 白柳  
 消印は熱海幸福そうな文字 一三夫

差出地消印とちがっている家出 好郎  
 消印の時刻刑事の眼に止まり 小松園  
 消印を留守居の妻が確める 生々庵  
 消印がきめて捜査のワクしほる 奈良子  
 消印が浮気のカギをにぎってる 虎声  
 観光記念消印はしい列に立ち 生々庵  
 消印が予定通り旅便り いさむ  
 手掛りは消印だけという家出 笑痴  
 機械にもミス消印のない葉書 肖二  
 今日の消印が有効になる締切日 贊  
 消印有効懸賞マニアはあわてない 一三夫  
 消印の日ぎりぎりまでもクイズ狂 武助  
 消印がキメ手となった指名犯 一三夫  
 切手前納判はこちらで捺させられ 金三  
 消印がアリバイ崩すもとになり 柳宏子  
 消印は意外市中にかくれてる 形水  
 消印が動かぬ証拠となってる 古方  
 消印を打つさばきにある年季 与呂志  
 金を借る印紙消印責めにされ 文秋  
 消印の日付けで辻褃合うてくる 古方  
 東京とだけ知る消印へ子をおもい 滋雀  
 消印の隣りに郵税不足印 生々庵  
 消印で蒸発先を突き止める 形水  
 腑に落ちぬ消印アリバイ崩れ出し 天笑  
 故国の便り消印まで温し 誓二  
 たくらみの投書消印よその局 村雲

席題「背伸び」

八木摩太郎選

つづまりは背伸びしたのが除名され 静歩  
 背伸びして探し求める目と出合い 幸代  
 背伸びして人の肩から観る不運 誓二  
 背伸びと背伸びとタクシーの順を待ち 生々庵  
 背伸びして孫婆さんと背を競べ 痴亭  
 お互に団地は背伸びする家計 頂留子  
 待ち呆気欠伸をしたり背伸びもし 鶴声  
 背伸びするより踏み台を先ず探し 柳宏子  
 背伸びした椅子に心をすりへらす 花梢  
 背伸びしてママに抱っこをもうせよ 誓二  
 背伸びせず悠々自適の老社員 綾女  
 背伸びした顔を社長ににらまれる つき子  
 野次馬が背伸びしている事故現場 つき子  
 借金の子の苦面の背伸びなり 宣介  
 背伸びし合う生活ほとほといやに 瓢太  
 背伸びしたビルが都会を造り交え 季賛  
 背伸びして這入った学校で棒を振り 笑痴  
 それまでの覚悟と決めてした背伸び 古方  
 交際の背伸びへ赤字だけがふえ 一三夫  
 背伸びして見合写真へポーズとる 儀一  
 銀行に黙殺されている背伸び 好郎  
 勝てそうにないライバルへ背伸びす 肖二  
 背伸びする気にもなれない養子です 虎声  
 暮しとは別に背伸びをするなさけ 花梢  
 背伸び位では勝てぬ相手とあきらめ 飄太  
 背伸びした社長名案出たらしい 喜風  
 背伸びしてあと一寸の壁の釘 小松園

背伸びした母が手をふるハネムーン 幸代  
 気楽さは背伸びをしない平社員 生々庵  
 反主流背伸びしたのが消えて行き 静歩  
 三十年背伸びしてたが定年来 一舟  
 背伸びにも限度転宅すると決め 操子  
 背伸びする見栄に月賦が追いつけず 静馬  
 背伸びした帰省を親は知って 与呂志  
 背伸びして見ても及ばぬ妻と添い 没食子  
 背伸びするママへきびしい子の意見 天笑  
 背伸びして見ても小卒たかめがられ 文秋  
 大事故で背伸びの暮しとがめられ 新之助  
 背伸びするマンション暮らして 一三夫  
 背伸びして見ても落ち目は隠されず 文秋  
 背伸びした意見非才を見透され 酔々  
 背伸びしてママのお耳へパパのこと 一三夫  
 税務署が去んでやれやれ背を伸ばし 摩太郎

兼題「ハンサム」 阿万万的選

弟がハンサム過ぎて間違われ 百水  
 ハンサムと思ひ込んで不仕合わせ 野迷路  
 そのサラリーはねとハンサム見くら 章雅

直原玉青著 創元社出版 二千元

「新しい南画と

俳画の描き方」

本社でも取次ぎいたします。



姉さんがほしいなほしいな初恋のま  
 妹の手を引く年子兄貴振り儀一  
 年上の順にならんだ敬老会双楽  
 年上が言うから素直に聞いておく季  
 痴話喧嘩奥さん七つ上という栞  
 年上と知って聞き手に早変わり虎声  
 ブランコの列年上が割込んでトメ子  
 年上の脇役陣が引き立たせ奈良子  
 年上のいとこがわるい知恵を貸し村雲  
 年上で苦手の挨拶させられる弓彦  
 年上に愛され愛すること知らず弥生  
 年上の意見ききにきて従わず花梢  
 禿げたのを上座へ呼んで叱られる葛城  
 披露宴新婦の年上にはふれず生々庵  
 年上の妻の弱身と知る嫉妬好郎  
 年上がこっそりチップ出してくれ花梢  
 年上の女房ちよいちよいツノを出し勝晴  
 年上をたしなめ兄弟喧嘩分け頂留子  
 イメージが似て年上の女恋う形水  
 年上の女房で心安らげる寿子  
 二次会で年上いつも損をする河産  
 年上ももう気にならぬ孫を抱き一舟  
 商売のきびしさ年など言うとなれず柳宏子  
 年上は仲間はずれの女事務金三  
 年上の意見に落付く部落会武助  
 年上の自重大いときめている恒明  
 年上を意識小遣いたんとやり白柳

年上のひけ目鏡へひまが要り滋雀  
 酔うても年上割勘など言わず小松園  
 年上を隠くす化粧がいじらしい一三夫  
 年上の妻やるせなし倦怠期操子

兼題「近道」  
 市場没食子選

出世する近道として婿養子あいき  
 近道はわかりにくいと回り道鬼遊  
 近道をとって人生けつまずき静馬  
 近道は陸橋があり嫌われる生々庵  
 近道を覚えなさいと虎の巻文秋  
 近道も教えてくれる国訛り  
 近道も教えてくれる国訛り  
 近道の冒険小川飛び越える形水  
 急がば回れ近道で踏み迷い村雲  
 近道に隠されていた落し穴軒太楼  
 近道は冥土へも又近かった野迷路  
 聞いて来た山の近道息が切れどんたく  
 里帰りやっぱり近道から戻り  
 近道を避けメーターを稼がれる滋雀  
 子が先に立って近道案内し酔々  
 出迎えが近道をして入れ違い一舟  
 近道は駅の柵越え芝生を踏み笑  
 十萬億土近道さけて参りましょ生々庵  
 月に往く近道星たちは知っていろ  
 近道をせずつよかつた花に逢い鬼遊  
 近道を地酒の店で聞いてくるトメ子  
 タクシーの良心近道行ってくれ奈良子  
 近道はよいが痴漢が出るうわさ一三夫

近道は健脚向きと書いてあり新之助  
 近道を小犬の方が知っていた笑痴  
 金儲けの近道元も子もなくし栞  
 立札を無視し近道する出勤形水  
 近道を通って来た靴拭いている弓彦  
 空白を埋める近道考える白柳  
 成功の秘決の近道おまへんか双楽  
 近道で自分のペース見失しない天笑  
 近道は谷あり山あり川もあり庸佑  
 近道も教えて我家の略図書き誓二  
 近道を選んだわけが別にありどんたく  
 近道も補道が出来てから変わり勝晴  
 近道の山の小道が暮れかかり摩天郎  
 近道も地価が騰って消えてゆき操子  
 大会社出来て近道ちゃん切られ摩天郎  
 金殖やす近道をしてサギに合い白柳  
 陸橋が出来て近道また替わり天笑  
 タクシーにこの近道も教えられ没食子

▼東京番傘川柳社創立三十年記念大会  
 六月十五日十一時開場・都立産業会館六  
 階・兼題・素顔・ひろがる・ささやか・  
 三十・友情・思い出・長生き・東京都文  
 京区目白台一―八―三同社。  
 ▼さいたま川柳大会―宿題・波・間接・  
 のこのこ・ポツン・動く・内弁慶・脱出  
 ―十五円切手七枚封入―浦和市常盤九―  
 一四―一六、武藤かめ吉方。

# 老地物壇

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

むらくも柳柳会（鳥根県） 藤井朗明報

潮時を知って握手くり返し 水客  
 降って湧いたように公害騒がれる 緑之助  
 昔なら飄たんから駒ハブニング 天痴人  
 花見から新入社員酒を知り 柳慶  
 結局は金で公害けりがつき 通児  
 田が売れ畑が売れて伸びる町 祥月  
 出世する二十年子宝に恵れず 明朗  
 柳の芽伸びて観光都市は春 孤呂二  
 潮時とねらった空巢犬が居り 独仙  
 美しい嘘つきあって二十年 鶴丸  
 急停車した満員の声をたて 与根一  
 公害はウヤムヤに企業拡張し 晃男  
 公害のある街お金のたまる町 和幸  
 虎の子を狙う投資のいい話 一郎  
 誘われて来ました飛入り花見客 白汀  
 本気でやれと本気叱られる 軒太楼  
 陳情で誘致公害で陳情し 君枝  
 満員へ幹事座ぶとん探してる 健太郎

二十年無駄骨となる子が背むき  
 狭い視野ながらはたちの正義感  
 公害を流す企業に養われ  
 子沢山夢中で過ぎた二十年  
 満員の見送りわけて聞く住所  
 生活の伸びに収支が伴わず  
 スモッグで遠くかすんだ天の川  
 花見ごさ男なりけり酔いつぶれ  
 公害は魚の住めぬ川にする  
 父ちゃんにねだる潮時知る育ち  
 むらくもが瑞雲呼んで二十年  
 潮時にさてときり出す借り上手  
 公害へ小さい抵抗ガラス拭く  
 病む妻と人出まばらな花を浴び  
 冗談が本気になった目の光り  
 ハブニング理解に困る事もやり  
 満員ヘパスは園児の歌に乗り  
 潮時へ姉の順など抜きにする  
 公害へ新芽ちぢれたまま伸びる  
 先生春斗宿題今日はなし  
 満員に片足浮いたままで立ち  
 絶頂の花見も下は塵に舞い  
 スモッグにあえぐようなり鯉のぼり

英子 紫 美 正 孝 加 芳 昌 清 勇 竹 千 花 代 成 茂 新 弘 瑞 節 華 磯 山  
 夢 馬 代 子 人 雪 朗 枝 枝 宝 山  
 夢 馬 代 子 人 雪 朗 枝 枝 宝 山

## 玉造柳柳会

西出一栄報

神木の根元子の手が八つ要り  
 からだ中ふるえ止らぬ穴を当て  
 貰い風呂してだらしな見て帰り  
 ゆっくりと母が数える上り風呂

宇宙太 文 秋 一 舟 鬼 遊

入浴場の扉若さへはね返り  
 終演の女に戻る楽屋風呂  
 借金がてれこになって言い出せず  
 子沢山てれこてれこにお小遣い  
 幼稚園てれこに履いたまま帰り  
 熱の入る話にタバコのとれこなり  
 真面目さでこっちもてれこ気  
 娘と婿がてれこで愚痴を云いに来る  
 里帰り何はともあれ横になり  
 年賀状も横書にして近代化  
 株相場横這いをして味気なし  
 試験官横目に難問イライラし  
 打明ける目が横顔を確かめる  
 横顔に女淋しいカゲを持つ  
 横顔を見詰めてる目に恋がある  
 習性かサラブレットは横を向き  
 横向いた素顔の斗志美しい  
 前進へブレーキめいた師の助言  
 前進をしすぎ引かれぬ羽目となり  
 タクト振られたので仕方なく進む  
 前進へ指揮者も重い荷を担ぎ  
 前進へ無駄でなかった回り道  
 ライバルの前進素晴らしいに見え  
 年寄りが孫の寒がりがかばいたて  
 寒がりの目に台湾はよいところ  
 お前こそ寒芽はがっちりど鍛着る  
 寒がりの父をもてなす鍋料理  
 無意識に寒がり炭火搔き廻し

金三 六 龍 子 白 柳 あい き 清 人 弓 彦 柳 宏 子 綾 女 風 仙 洞 竹 青 双 葉 頂 留 子 葵 水 形 水 虎 城 章 雅 静 步 育 園 清 子 照 一 富 久 一 静 馬 一 栄 一 菓 二 古 方 当 二 金 三

寒がりは今朝の零下を肌で当て  
小春日に寒がりやっつと髪を刈り  
南大阪川柳会 金井文秋報

つかの間の逢瀬と知って待ちわびる  
欲のない指も迷うて抽いた籤  
そうかて迷いまんがなとは女  
睦ましい対話がもれて寝つかれず  
我を通すだけの対話になる若さ  
困る事あるから人間考える  
学歴を見せる対話が鼻につき  
困っても泣き事言わぬ妻があり  
東の間も別れて居れぬ仲となり  
迷い子札どおりケロツと届けられ  
おだてても若手なかなか動かない  
束の間の眠り乗り越してしま  
トースターで勝手に焼けと倦怠期  
駄菓子屋で迷う子の手が宙に浮き  
つかの間に散る花でよしさくらんぼ  
迷いあけすけに庶民の朝となる  
対話にも嘘を交えてまるくゆき  
若手より老医が流行る婦人科医  
敏腕の若手刑事が冷めたすぎ  
万年床横にトースター独り者  
弱腰と若手が幹部突き上げる  
若手には勝てぬ勝負と知って受け  
一笑に付して若手を意識する  
静馬

妻が来て子との対話の的が外れ  
子供会対話のルール知っている  
税吏との対話笑顔はなく終り  
背信のそれから対話避けたがり  
二次会の若手部課長こきおろし  
どんぐり川柳会(大阪市) 川村好郎報

通り抜け花の季節をはだで知り  
親子代々福耳という遺伝  
かべに耳小姑同志目で叱り  
どんぐり川柳会(羽曳野市) 川村好郎報

夜のお蝶人柄までも化粧して  
太陽の恵みも石の裏表  
退院は道の小石も笑ってる  
石垣にたずねてみたい武将の夢  
人柄へ金の入歯がよく光り  
ふみ石よそれでもお前は幸か  
石橋をたたいてチャンスとりにがし  
病みてなお人柄豊かに鶴折りぬ  
人柄をほめる仲人セールス調  
人格者といわれたばかりにくどけ  
石垣のすきまを飾るすみれ草  
一里塚見あたらぬ旅もまた楽し  
お人柄しのぶにかるき千円札  
両親がいろいろと仲人食い下り  
あすなる川柳会(大阪市) 川村好郎報

静馬 好郎 小松園 白柳 好郎 青木 一治 桂馬 九鬼 良行 吐来 中島 豆行 輝々 善太郎 房人 好郎 比呂路 敏雄 弥生 青磁 双夫 双砂 真砂 鬼遊 草春 保

バイタリテー春雪などに負けていず  
早春の見舞覚悟して帰り  
足袋ぬいで白い足裏春を見る  
長老が出てまどまるのはもう昔  
親同志まじめに縁談あとでもめ  
まとまりのない話にしびれきれ  
どどのつまり頼れるものは己だけ  
嫉妬また手まわりまどめる手を使い  
好郎

大阪通信病院川柳会

森下愛論報

胃が痛む程馳けて来た忘れもの  
爆破事故以来気になる忘れもの  
忘れものないよとランドセル嬉し  
残処理に困るものあり忘れもの  
指先も身振りもアマを出た奇術  
指先ではじく写真のいやな人  
指先と云うにお化粧ひまがいり  
指先をなめてへそくり勘定する  
愛論

丸文協和川柳会(倉敷市)

藤井春日報

駐車料買物よりも高うつき  
火の車物価より酒のせいになされ  
駐車場無くて老舗も客が減り  
お車でと云う奥様の襟の垢  
母親の毒味する間が待ち切れず  
未亡人位牌にすまぬひとを待ち  
打掛で腹をかくして式を挙げ  
幾度目の誓詞を聞くか貸衣裳  
ハイお次新カッパがまた生まれ  
ニューフェースと云う間に金を貯め

一世 泉睦 寿子 茂児 扇里 信代 瓢太 好郎 秋風郎 晴夫 史葉 幸男 没食子 竹荘 草右 愛論 痴愚老 翁童 酪酎 春日 緑風 黒山 健風 芳山 健山 芳仙

新人は会う人ごとにと頭下げ  
肩車乗せたおやじは今はなし  
新人のよき失敗を恐れない  
富柳会(富田林市) 阿部柳太報

成人の息子をだしに飲み歩き  
エロやぐざ以外に成人映画なし  
兵隊を知らず角材もつはたち  
寒波襲来入場券は今日限り  
寒波来襲待ってましたとりの熊  
周旋屋の車親切だけでなし  
新入車買ったばかり遅刻がち  
君だけでない弱気へ肩を持ち  
教養が彼の弱気に輪をかける  
税務署を出てから弱気を悔いはじめ  
ネジ巻いた弱気中途でちこまり  
当方は辞退先き様乗り気なり  
スランプに弱気な妻が輪をかける  
頑張った父が弱気の保護願  
云い負けた弱気が門をどなって  
なりゆきに任せた弱気悔いる今日  
気の弱さ又押し売りを喜ばせ  
気の弱いたちで女難をふり切れず  
すれ違うだけでうれしい気の弱さ  
グループで無ければ抗議もよう  
グループをはずされ石を蹴り帰る  
グループの紅一点に引きずられ  
和歌山短詩型文学クラブ 垂井葵水報

翁童 文丸 素身郎 つき子 美房 美房 小松園 凡吉 宏子 欽正 笑痴 八郎 吸江 柳太 金三 花梢 摩天郎 天笑 美代 吉太郎 好郎 千万子 百水 独太 白柳 次章

予定日は何時かと聞いた優しい日  
予定通り事はこんで物足らず  
予定ではとくに家は建つた筈  
予定日が近く祖父たる避け難し  
旅籠予定を変えた湯の香り  
飛行機も落ちる場所に気を使い  
出世コース捨ててはげしい恋に落  
おろかだと知った虚勢の肩落す  
咳払い声を落して目で話す  
のど自慢歌にもならず落ちて  
落ちるだけ落ちて青色申告す  
落ちてくれ受かってくれと付添われ  
ニュートンが落ちる学説月に無し  
妥協などしていぬ姿勢鍋みがか  
鍋と蓋合っているのははじめだけ  
鍋さげて出たのに豆腐や行ったあと  
鍋の底黒くなつてて左前  
久しぶり鍋総動員の祝いごと  
割れ鍋に閉じておかしな夫婦なり  
ウイロー社句会(ハワイ) 快夢起報

太茂津 公作 宣水 不二也 純和 佐和子 智恵女 泰子 繁治 城石 勉治 光治 淳彦 泰彦 三幸 三幸 盛太郎 紅溪 泉水 浮草 K女 エス子 雪女 蒼蛇棲

横着な奴だが利用もできる奴  
盲目の愛横着な子に育て  
経験は尊し横着板につき  
横着を重ねて世間を狭くする  
とやを出た嬉しさ雛は首をふり  
鶏鳴いて燃ゆる別れをせきたてる  
首撫でりや鶏観念の眼を閉じる  
含嗽するように小鳥は水のみ  
ねぐらへ急ぐ鳥もあるのにこの俺は  
もう一局もう一局に鶏が鳴く  
養鶏で臍くり作ることに決め  
焼鳥になるとも知らず渡り鳥  
備前川柳社句会

老二人湯呑みも二つ日向ぼこ  
記念品努力と書いてある湯呑み  
茶のしぶのついた湯呑みの値にあふ  
婦人科の待合室にマリイア像  
妹の顔も仕上の刷毛ついで  
婦人科へ消えたうわさの未亡人  
顔を売る人も来賓席におき  
お見合の湯呑みを娘ぐらつかせ  
あどけなく三つの孫が恋の歌  
才あそば小説にもしたい過去  
犬連れて歩けば裕福そうに見え  
にせものにあぐらかめままの軸を見せ  
お多福であつて平和な日を過し  
顔色でふところ具合を見る女  
茶柱が立った湯呑を差し出され

あき坊 万里歩 斧平 紅茶 三石 笑有 曉舟 カロ女 魔法麗 柳葉 快夢起 拜山 目賀芳月報 千秋 鮎ン坊 初美 芳月 伊久野 芳明 浄美 胡風 柳子 万女 一声 たくお 正州 三与子 幸仙

にんにくを食べ仁丹もかんでおき  
知らぬ顔して旧友の通りすぎ  
かんばいがかすめば湯呑みに替り飲み  
オーエスケー川柳会 大坂形水報

タイミンクゴキチチャンス無駄にする  
チャンスとは努力によって生れ出る  
正月の当番呑んで寝起きて食べ  
初めての機会で射止めたステキな娘  
絶好の機会を生かす金がなし  
恋愛のチャンスもなくてママになり  
当番へ一度に電話二ツ鳴り  
当番へ差入れのくる春日和  
残念さデートの機会逃してた  
灰落ちてから灰血を捜す癖  
落ちるだけ落ちてようやく目を覚まし  
人材を抱え機会を狙っている  
かんじんの事云えぬまま家の前  
癖のない人とほめられあなどられ  
当番の責任で聞くことが出来  
待つだけでチャンスは来なると知り  
和気川柳会(岡山県) 藤原秋月報

成人し少年Aではすまされず  
プライベート日記をのぞく母はいや  
この軍手一家の生活かかっとなり  
冬山でポケット日記が母に詫び  
白状をしたらストープつけてくれ  
成人の式の言葉を噛みしめる  
手袋を啜えた口で買う切符

若き日の思い出のあり古日記  
雲の峰仰いで成人式が晴れ  
うまさうな鶏が垣根を越えて来る  
全学連の姿が少し軍鶏に似て  
成人の日をはればれと猪口を受け  
夢捨てぬ日記へひそむ青い鳥  
松の内まではきれいな文字で書き  
デモ隊へ道をかわした試歩日記  
川柳たましま 水粉千翁報

ストープに遠く聞き耳立てている  
後悔をするから早く産めと云う  
冷え切った心にしあわせ逃げて行き  
ニンゲンに帰る日故郷の丘に立つ  
後悔の色見届けて調書閉じ  
哀しみに堪える粉雪踏んで行く  
諦めるすべなきものをばたん雪  
悔ゆる身の指ヘダイヤの無表情  
そのあとが何か気になる咳ばらい  
ぼたん雪すねた女の濃化粧  
手遅れを身内へ話す小さい声  
叱言まだつづくストープ熱すぎる  
アベックヘクシヤミ聞かまパトロール  
赤飯にならずダルマの目も入らず  
逃げの隙あるよう母が叩きに來  
ハックション僕を肴にする噂  
忠告に背いた俺の道である  
逃げて来て妻の心の中で寝る  
ストープへ椅子をまわして意見され

麗水 幹定 慶子 千代香 扇水 澄子 三林坊 梁水 俊子 里風 秀魁 好郎 朝二 柳子 秀子 瑞芳 克枝 林鶴 三辛堂

後悔をして前向きを崩さない 千翁  
こまつ句会 山上千太郎報

斜かいに人出を抜ける儲け口 茶 仏  
大学に今年虚しき花吹雪 柳  
要求が未決の中でさくら散る 友 孝  
花の宴見知らぬ人と飲み交す み さ  
酔う程に長いくごと聞かされる 清 香  
うかうかと飲んだ機嫌の後始末 城 南  
長居して涙話にまで及び 香 径  
花の雨走る凡夫のわが姿 末 吉  
当て込んだ人出茶店に雨無情 弘 美  
ゲバ棒の行き交う庭に散る桜 たつ路  
外人も混り桜の名所混む 芳 朗  
一泊をする気夜桜見に出かけ 魚 山  
人出から抜けて二人になった足 松 水  
人出何万知ってる顔に会う奇遇 千太郎

祥月報

川の庭子等の善意で花が咲く 唾 蟬  
桜が担ぎバランスがっちり天守閣 孝  
体調のバランス保つ腹八分 巡 歩  
あたたかい善意が重い募金箱 舞 吉  
限界が来たとバランス揺れつつ 白 汀  
米ソのバランス地球廻って居り 与 根 一  
小さい善意大きな勇氣がいら 鶴 丸  
かげろうがもえる団地は南向き 孤 呂 二  
ヘルメット新築の槌音はね返し 晃 男  
赤い羽根今日も善意の人に竹つ 紫 吻  
日本のバランスインフレに揺る台風に揺る 天痴人

かげろうは燃え青々と空笑う 祥 月  
川柳たけはら 山内静水報

降る雪に少女の夢は果てしなく 佳代子  
スポーツが好きあの子はもてている 洋子  
郷愁をさそう竹原ぶどうの実 康 宏  
あどけない少女のミニがよく似合い 勝 彦  
誰もいぬ世界私と時計だけ 淨 美  
オリオン座冷えます今夜酒が欲し 孚 彦  
陽だまりの二人言葉はなくてよしのり子  
ていねいな言葉になって妥協する 鬼 焼  
飛行雲仰げば淡い 星の月 不 動  
とぼとぼと罪ある如く雪に消え 不 朽  
まん丸い少女の瞳に夢があり 芳 則  
とすれば僕が慌てた事になる 菁 居  
人生観ころりと変えて退院す 蘭 幸  
梅だより伍健忌だよりあとやさき 紫苑狂  
どろどろと濁りたまる日よ孤にひき 政 己  
倅せは叱ってくれる人が出来 ひで子  
本心をどこへ隠そう取りまかれ 静 火  
末ッ子に予防注射をすすめられ 房 子  
肩叩かれて勇退とは哀れ 静 水

ふじかけ短詩會

藤本礎山報

見せぬからノート秘密らしゅう見え 朱 実  
卒業へ成長ノートを繰って見る 香 絵  
過去帳の祖先の記録ノートする き ち  
ノートから彼も同志と知る誇り 二 朗  
亡き祖父のノートの日記に哭かさ 美 弥  
記録したノートに言訳もう出来ず 恵 子

日々はげむ記録をノートして伸ばし 良 枝  
ライバルの記録もノートして讃え 和 宏

無灯火を懐中電気にノートされ 葉 舟  
優良児成長記録ノートする 征 山  
悔い多きノートの日記焼き捨てる 泰 嗣  
亡き母のノート頼りに梅を漬け 貴 恵  
新妻の料理ノートにしがみつき 佳 女  
病床の友へ補習のノート貸し 忠 志  
遭難のノート絶筆手記も出る 和 久  
ノートして居てアリバイが認められ 勝 久  
ノートする大事件なく夜勤明け 鎮 也  
残された亡父のノートに智慧を借り 礎 山

紙風船薬箱から見つけ出し 光 子  
古書の色変り果ててる文化財 久 美  
障子紙貼ってクリスマスもう近い 美 代  
折紙もおぼえて退院もう近し 国 子  
快よき日の薬包紙鶴になり 昌 代  
市役所の肩籠使える紙があり 千代子  
開くまでのうちが楽しい包装紙 勝 子  
おさな児の背文けに破れる障子紙 美 禰  
カラカミが破れ明治が顔を出し 佐知子  
民芸紙山郷の名をおぼえさせ 二 朗  
のし一つって目出たい紙となり 敏 彦  
一切れの紙が捜査の謎を解き 由起子  
卒業証この一枚にしごかれる 宏 ち  
画用紙に稚ない夢が書き切れず 和 宏  
以上小・中学生

お習字の紙へぬたくるやんちゃな子  
 お茶席に懐紙忘れたあわてよう  
 美装会せいたく過ぎるチラシが来  
 有名と無名へ色紙の運きまる  
 字も読めぬピラ電柱にしがみつ  
 プライバシー守る障子が紙一重  
 しあわせな紙は紙幣に生れつき  
 書き初めに心鎮めて紙を展べ  
 屑紙のネンドが稚ない夢育て  
 礎山

一城の主 夢みる 蝟 焼屋 風仙洞  
 頑固さが職人氣質損な人 富士  
 父親の無職がひびく子の運命 茶々坊  
 本職もハダシと賞めて棚吊らし 行有  
 アルバイトしてでも向学心に燃え 多幸  
 爪に火をともし内職だけで生き 濁水  
 内職でレジャー楽しむ世と変り 奈良子  
 内職の母は仏に愚痴を云う 生川  
 国宝と云われた職だが後が絶え 聖川  
 プロ意識素人芸をやたらほめ 弘生  
 駿河路で茶碗に富士を入れて飲み 一登

独特のムードへ易者さそいこみ 奈良子  
 つかんだ手離さず易者話しかけ 進  
 神詣り帰りは易者に見てもらい 一休  
 大吉の易が縁談ふみきらせ 多幸  
 おみくじの凶の一字が気にかかり 芳  
 ローソクで見てくれた相性今も居る 富士

生酔のからみを易者もてあまし 三十四  
 よく当たる易者尋ねる裏長屋 弘生  
 牛歩戦術と党がアクビかみ殺し 鉄舟

外食から帰り茶漬を喰って寝る 弘生  
 四十年妻の料理に飽きもせず 多幸  
 小料理の行燈が目につく酔心地 富士  
 メモ帖のこんなはずではないお味 はぎ乃  
 誕生日重いお餅を背負わされ 芳  
 誕生日喜ぶ人は弥陀のそば 武野

病癒えそろそろ元の不信心 濁水  
 初えびす福を信ずる笹の波 多幸  
 神があり仏があつて世は平和 一登  
 数々の祈願をこめて初詣り キサノ  
 神仏の加護も身にしむ年となり ハヤ  
 駐車料とつて仏殿の屋根を葺き 弘生  
 神仏も多角経営目をつむり 漁人  
 誘われて来たのに割勘押しつける 風仙洞

南海電鉄川柳会 (大阪市) 辻圭水報  
 子の遊び白バイまねる世相なり 清涼  
 マラソンのトップ白バイのガスを吸い 天笑  
 白バイにタコをつられた集金日 摩天郎  
 白バイが若さと思ふ事故であり 圭水  
 テレビドラマ白バイが来て安心し 宏子  
 スピードに敗けた白バイ引返し 貴山

柳界 短信

▼富士野鞍馬氏の夫人が五月十四日長逝され

十五日午後二時から自宅で告別式が執行され  
 た。深く哀悼申し上げます。

▼関西川柳懇話会第五回会合は五月十五日午  
 前十時からキリンビール向日町工場見学後、  
 京都細川別邸で懇親宴を持ち、金地院庭園な  
 どを拝観した。川柳塔社から白柳、形水両氏  
 と薫風が出席した。

▼北国川柳社創立、主幹に山田良行氏。幹事  
 長は能村唐衣氏。月刊『きたぐに』発行。定価  
 百円、送料三十五円。振替金沢九七四六番一  
 発行所、金沢市大樋町三番一号。社会保険鳴  
 和総合病院内、北国川柳社。

▼若本多久志氏は五月二十五日帰日。  
 ▼後藤梅志氏は五月二十日退院された。

玉造川柳会 (大阪市)

時 六月十日 (火) 午後六時  
 題 罰金・助手・そっと  
 所 玉造交差点 南一〇〇米

大阪信用金庫

南大阪川柳会

時 六月二十日 (金) 午後六時  
 題 新た・帰る・友達・追憶  
 所 松崎町二丁目 以和貴荘

本社句会と同じ会場です。

# 柳人暑中交歓受付け!

本年も「暑中広告」にご協力下さいませ。下のスペースが二百円本誌五分の一段が千円です。

幾口でも結構です。同人名簿は雅号だけで、アドレスを知らせあいましょ。原稿締切は六月末日。

川柳塔社

振替口座大阪  
三三三六八番

川柳塔社

## 本社六月旬会

日時 六月六日(火)午後六時  
会場 以和貴荘(いわきそう)

阿倍野区松崎町二丁目  
電話 622・1275番

兼題 柳話  
「天氣予報」  
「女性上位」  
「おもわく」  
「ナイフ」  
若本多志  
神谷凡九郎選  
傍島静馬選  
戸田古方選  
正本水客選  
兼題 三題(題と選者は当日発表) 各題三句  
席題 三題(題と選者は当日発表) 各題三句  
会費 二百円  
★ 投句だけの方は切手五十円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います  
大阪市南区縹谷仲之町20

川柳塔社

電話大阪 3985番

7月の予告は表紙の2へ

### 八月号発表(6月15日締切)

川柳塔(10句) 中島 生々庵 選  
近作柳樽(10句) 菊沢 小松園 選  
課題吟(各題5句以内)

「転勤」 藤井春日 選  
「野心」 松岡委滄浪 選  
「折り目」 上田翠光 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

### 九月号発表(7月15日締切)

川柳塔(10句) 中島 生々庵 選  
近作柳樽(10句) 菊沢 小松園 選  
課題吟(各題5句以内)

「親切」 原 独仙 選  
「家」 野呂鶴汀 選  
「宣伝」 浜田久米雄 選

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。  
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

高鷲亜鈍著

「白黒記」

送料共 七百円

若本多久志著

「老い坂」

実費四五〇円 送料七〇円

橘高薫風著

「れん」

送料共 五百円

八木摩天郎著

「古川柳に詠まれた堺の人々」

送料共 七五円

(堺市南清水町三十二 新谷笑痴)

・ペンペン草・

★六月号もこの後記でおわる。四十四年度の折り返えし地点だが、これという仕事もせぬまま、六冊積み重ねてしまった。

★後記といえは、同人誌の場合、一応どなたかに読んでもらっているので、すこしは気のきいたモノを書きたいのだが、なにせ四十何時間ぶつつづきのあげくに

★路郎先生は、二枚たらずの後記に数日間要されたこともちよいかいあつたが、これは主幹だからそういうムリもきくわけで、一編集部員なら後記を書く時間に三十分もくれないだらう。

★ボクの場合、毎月二誌の後記を書いているわけだが、それを印刷所へわたさないと寝られないので良いも悪いもない。だから後記だけは一番先に読んでいるよーなんて云われると、ほんとに穴があればもぐりこみたくなる。

★穴といえは、ボクなど穴埋めのつもりで書くのだが、路郎先生は、その点き

びしかった。何度も何度も書き直しされただけに、やはりどこか違っていた。

★本社句会の会場である以和貴荘は、ボクの知るかきりでは、最高の句会場である。冷暖房から照明にムードに、たしかにバツグンだが、ここは結婚式場によく使われるので、大安の日には句会はシャットアウトである、そのかわり仏滅の日ならいつでもOKという会場だ。最近ではこの会場へ来るのがたのしく、毎月の句会が待ち遠しいくらいだ。それにしてもいまだに大安とか仏滅とかいうのがあるとは愉快な話である。

★梅志氏が入院前日に七月号の「私論・柳論」を送ってくださいました。責任感の強い人である。

★岩中広告、またよろしくお願ひします。

★値上げブームの中に柳誌だけ函を食いしばって、ガマンをしている。

(不二田一三夫)



疲れ  
肩こり  
食欲不振  
つかれ目  
神経痛に  
タケタ薬品  
アリナミン

★六月号もこの後記でおわる。四十四年度の折り返えし地点だが、これという仕事もせぬまま、六冊積み重ねてしまった。

★後記といえは、同人誌の場合、一応どなたかに読んでもらっているので、すこしは気のきいたモノを書きたいのだが、なにせ四十何時間ぶつつづきのあげくに

★路郎先生は、二枚たらずの後記に数日間要されたこともちよいかいあつたが、これは主幹だからそういうムリもきくわけで、一編集部員なら後記を書く時間に三十分もくれないだらう。

★ボクの場合、毎月二誌の後記を書いているわけだが、それを印刷所へわたさないと寝られないので良いも悪いもない。だから後記だけは一番先に読んでいるよーなんて云われると、ほんとに穴があればもぐりこみたくなる。

★穴といえは、ボクなど穴埋めのつもりで書くのだが、路郎先生は、その点き

びしかった。何度も何度も書き直しされただけに、やはりどこか違っていた。

★本社句会の会場である以和貴荘は、ボクの知るかきりでは、最高の句会場である。冷暖房から照明にムードに、たしかにバツグンだが、ここは結婚式場によく使われるので、大安の日には句会はシャットアウトである、そのかわり仏滅の日ならいつでもOKという会場だ。最近ではこの会場へ来るのがたのしく、毎月の句会が待ち遠しいくらいだ。それにしてもいまだに大安とか仏滅とかいうのがあるとは愉快な話である。

★梅志氏が入院前日に七月号の「私論・柳論」を送ってくださいました。責任感の強い人である。

★岩中広告、またよろしくお願ひします。

★値上げブームの中に柳誌だけ函を食いしばって、ガマンをしている。

(不二田一三夫)

・句稿に 通信に・

川 柳 塔 柳 箋

・一冊65円・送料35円・

定価 百四十円 (送料六円)

半年分 八百七十円 (送料共)

一年分 千六百八十円 (送料負担)

昭和四十四年五月二十五日印刷

昭和四十四年六月 一 日発行

大阪市南区船場谷神之町二〇番地

編集兼 中 島 蓬 太 郎

発行人兼 大陽印刷株式会社

印刷所 大陽印刷株式会社

郵便番号 五四二

大阪市南区船場谷神之町二〇番地

発行所 川 柳 塔 社

電話大阪・二七一・三三九八番

郵務口限大阪・三三三六八番

お買物は  
4都を結ぶ  
大丸へ!



大戎  
阪橋

# 味に輝く 北極星

TEL 06 (641) 1275 (代)



## チェーンご案内

戎橋本店	味堂	やわらぎ	庄内	店
"	結婚	式場	和堺	店
曾根崎店	やわらぎ	殿	喜連	店
野田阪神店			住道	店
野田阪神店			瓢箪山	店
永楽橋店			若江岩田	店
百舌鳥店			我孫子	店

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可  
昭和四十四年五月二十五日 印刷  
昭和四十四年六月二日発行 (毎月二日発行)

川柳塔 六月 号

料理も電話も

# 551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

# 豚饅 蓬策 焼売

大阪 なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋 / 心齋橋そごう / 梅田阪神 / 天満橋松坂屋  
堂島地下センター・弁天阜頭支店 / 中之島サン・ストア

定価 百四十円 (送料六円)